

正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十四年一月十五日發行 第十六卷第一號(毎月一回十五日發行)

本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

誌柳刊月の威權高最
燈識標の強勉生人

麻生路郎★主宰

川柳の雑誌

(員動總神精民國) !!に後銃は等我 !に線戦は士兵★

14/2

181

號二第 卷六十第

行發日五十月每



銃後には
銃後の
句陣を
張れ！

本社二月例会

技を磨くに好適のシーズン先進後進の別なく來會されまし

21 日
夜6時 (火)

★會場 誓得寺 (電話南四八八六)

市電清水町電停一丁北ノ辻西入

★兼題 「赤鯛」(三句).....麻生路郎選

★柳話 「題未定」.....水谷鮎美選

★會費 三〇錢(川協章提示の方は二五錢)

★呈賞 天位(各題)に粗品を贈る

幹事・潮花・豆秋・春水・ライト・双虎・
里十九・紫香・水客

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六(昭和ビル)

川柳雜誌社

電土佐堀三三三・八一六三・八一六四番

／る募を員社

二十才より三十才までの方。
男女を問ひません。
採用 編輯部・營業部 二名。
履歴書(寫真と共に)郵送の事。
面會日追つて通知致します。
手當其他委細面談の上。

大阪市西區筑前バシ電停前
昭和ビル二〇一號室

川柳雜誌社



★

パーマメント

は

ナショナル

大阪・心齋橋筋周防町角

山口倫子 經營・電南 992

B.7圓 A.10圓

- ・シャンプー
- ・セツト
- ・附屬共

★戦線へ銃後へ爆笑を送る快著／

新川柳評釋

麻生路郎著

戦線への
慰問品は

随分御苦心なさいます。何處をどう廻つて行くか。幾日かかるか豫定がつかないので、毀はれ易いもの、腐敗するものは全然駄目です。その點本書は斷然最適の慰問品として戦地で喜ばれてゐます。即刻お送り下さい。

本書は本誌に連載され名評釋として好評噴々たりし「川柳評釋百句」及び「川柳名句評釋」の二篇を合纂したるもの、評釋の輕妙さは日本柳壇に於ける著者の獨壇場である敢て薦む／

★ 四六版上質編フラ 紙一四〇頁
★ 定價十八錢 送料六錢 郵費別 外他八錢

大阪西區成玉本通三ノ六

發行所 不朽洞

振替大取三〇九二番

留守部隊の戦線異状なし

彼はさう何處でもして居るだらうか。討伐に出かけて小氣味よく敵をやつてゐるだらうか。それとも山上で歩哨に立つてゐるだらうか。病氣にかかつてはゐないだらうか。そんなことを考へはじめる、きまつたやうに私は留守を待つてゐる家族の事を思ふ。

ジツとしてゐない。よし、これから留守部隊の訪問をしよう。そして家族に代つて留守部隊の戦線異状なしの報告を綴つて戦線にある柳友へ送つてやう。

それが一番の慰問になるだらう。斯う決心したらすぐに断行だ。先づ第一に川柳雜誌社の不刊編輯員宮岡白峯君の留守宅を訪ねる事とした。

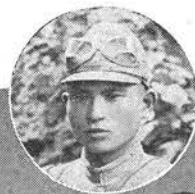
ソ満國境の警備から、南支に轉戦した宮岡白峯君の留守部隊の所在地は南河内の柏原町南郷にある。天王寺驛から名古屋行の汽車に乗つた。汽車に乗るのは全く久しぶりだ。昨秋蒙疆からの歸途、北支から山海關、奉天を経て大連に到る大陸の汽車に乗つてから、はじめての汽車だ。なんだか遠い旅に出るやうな氣持がした。

週間朝日を拾ひ讀みしてゐるうちに、柏原驛に着いた。驛前で南郷を訊いた。兎に角大通りを街道の方へ出て少しく北行した。そこに新聞の

販賣店があつたので再び訊く。親切に調べて呉れたが判らない。青年團の幹事の家で訊いたらすぐ判つた。

小さな溝を渡つて玄關に立つた。訪なう聲に應じて出て來られたのは奥さんの公子さんだつた。公子さんは関秀川柳家だし、舊知の間柄だし、「マア」と云つたきり、しばし突ツ立つて驚きと感激の瞳を輝やかせてゐられる。奥さんは、白いエプロン姿だ。何かと家事に忙しらしい。奥の座敷へ通される。正面の懸け額の中には、天皇、皇后兩陛下の御眞影、床の間には、豹死皮留豈偶然湊川遺跡、水連天人生有限名無濁此、精忠萬古傳。

楠中將 龍馬書



留守部隊の其て君峯白岡宮

書の色紙が丸額におさめられてある。おそらく君が出征當時の姿そのまゝであらうか。それとも奥さんの心盡しか。その下方の机には君の小型の寫眞が立てかけてある。朝夕、この寫眞に向つて君が武運長久を祈つてゐられるのであらう。

留守部隊は夫人の外に、母堂きく

陣中に

宮岡白峯

一番乗り丸きカッターにゐる夫人
部隊長四角な口で叱つこき
自警團日本軍を褒めて去に
日の丸の端へ日記も書く日向
俺は銃君は議會のラヂオ聞く
犬の聲して夜中の歩哨
廣東の街で右向け左向け
トーチカの國旗へ限り無き涙

さん(七二)と、愛嬢の武子ちゃん(八つ)と昭子ちゃん(六つ)の四人だが、母堂は舊正月なので郷里へ歸つてゐられるそうだ。

「寫眞は来ませんか」

「まゐりません、送つてはいけません」

「だそうです。こちらからは送りませんが」

「手紙は？」

「一月の十四日頃に来ました。元氣だそうです」

「何よりです。社の方へは句が來てますよ。奥さんも、少し作つたらどうです」

「あちらからも句を作れ」と云つて來ますが、何かしら忙しくてち

趣味の古本屋
鬼文堂
心斎橋南區
東へ下北側



陣中慢斷

月原宵明

○敗殘兵
深窓の麗人です。仲々お顔は拜めません。彈丸のとりやう後漸く顔を見せてくれますが、無表情つたらとてもお話になりません。

○防空壕
子供のくくれんぼにもつて來いです。又水の排け場としては恰好なもので深く感謝致します。

○洗濯
お洗濯は女性的ですが洗濯は荒仕事です。とまれ戦後奥様奉謝思想は普及徹底されませう。

○炊事

これも女尊の轉向原因の大なるものです。但し奥様ツに乗つて度々仰せつけるべからず、近隣の鶏、郊外の田畑を荒すに至りますから。

○慰問袋

欠食の兒童にアンパンを與へてよく眺めて下さい。

川柳雜誌

二月號 目次

○誌
薄い戦争髭が生えて喜んでおりました
が、昨日見た捕虜の聲と同じだったので断
然刺つて落しました。

○軍事郵便

綴方教室の机はサクラビールの空箱で
す。アンペラ小屋の中から戦争文字が間斷

表紙寫眞：(大同・石佛) 岩崎柳路
雲岡の石佛寺 麻生路郎(二)

留守部隊の戦線異状なし (一)

陣中漫斷 (一) 月原宵明 (二)

詩人 國民兵の辯 高鷲亞鈍 (九)

複眼

武玉川三篇研究 (三) 森東魚 (六)

評句 近作柳樹から 福田山雨樓 (二)

東京だより 銀座 島 (三)

街に住めば 高橋かほる (二)

陣中より 宮岡白峯 (一)

近作柳樹 麻生路郎選 (四)

川柳塔 諸家 (四)

一鳥居 塚越正光選 (六)

集路ペン先 後藤青兒選 (六)

各地柳壇 同情週刊川柳大會句報 (三)

後・記(表) 社關係の人々 (表)

柳界展望

日本柳壇百人撰 (八)

川・協 望郷 (九)

望郷 (九)

「望郷」を觀る(句) 須崎豆秋 (二)

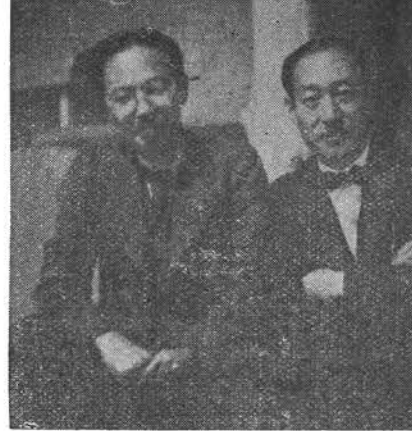
歌舞伎座を詠む 楊井二南 (二)

歌舞伎座を詠む 姫田夕鐘 (三)

なく生れます。

○苦力

何の楽しみがあつて、毎日眞黒に成つて
働いてゐるのか、僕の支那語がうまくなつ
たら、聴いてみようと思つてゐます。多分
彼は「まだ下には、兵隊と云ふ商賣がある
のですよ」と答へるだらう。



雲崗の石佛寺

北支蒙疆の印象(Ⅲ)

麻生路郎
写真 岩崎柳路

雨のために泥濘となつてゐて轍が又してもずりこんでしまふ。城西三十支里(約五里)の難行を續けて漸く雲崗村の石佛寺に達した。

どつてウツ／＼した。五時頃に停車したのを感じた。意識モローのうちに自分の前の將校を揺起してゐる従卒らしい男をみかけた。大同に着いたことを知つたので下車の準備を始める。誰も彼もが悠々として下車準備をやつてゐるさすがに大陸の列車はのんびりとしてゐる。驛の外へ出たが、まだ夜は明けきつてゐない。霧のやうな雨が降つてゐる。空氣の冷さが肌に迫つてくる。レインコートの襟を立て

この雲崗の石窟は支那佛教美術の最大な遺物で舊名を武周石窟と云ひその所在を靈巖と云つた。後魏文成帝の世、沙門曇曜が開鑿を始め孝文帝の太和十八年洛陽遷都に至るまで約四十年間開鑿されたもので、今から千五百餘年前のものである。石窟の延長は東西十數町に及び佛像の大きなものは、高さ七十尺、洞窟に造りつけた廟の最大のものが高さ二百餘尺、三千人を入れることが出来る



大陸は招く
満・支・蒙への
OSKライン

大阪商船 一呈進書内案一

都會であつたが、今は管北自治政府の首都となつてゐる。

八日の午前十時頃頼んで於た石佛寺の自動車が來た。今日は天候が悪いし、とても駄目ですと云はれてゐただけにやれ／＼と思つた。寒いので市中で酒を用意して出かけた。自動車が市街を離れると、成程道が降

しめるものがある。この偉大な藝術的作品も戦禍の渦中に巻込まれてゐたが、今では皇軍と管北自治政府の力によつて、その完全な保存が行はれようとしてゐる。石佛寺には皇軍の警備隊がゐる。そして次のやうな立札がしてある。

警告
石佛寺古蹟皆爲中國重要

【評句】

近作柳樽から

福田山雨樓・西田 艸樂

一人行くことはなかりけり 千秋

出征を勵ます方は酔つてゐる 風葉



山三度ばかり遊んだことのある泉都、かつて薄命川柳詩人晃卓君が住んでゐた別府。そこはもう享樂の巷と化して去つて、遊蕩的な雰囲気が一入旅の若者を無性に淋しがらせずにはおかない。實感の迫つた句。
艸二句は過去を反省した形である。で、遊蕩的な雰囲気にはなされた悔恨であるべきで、別府はそんな経験者を澤山作つてゐる筈が一人者が温泉場に来て悔ゆる事は、新婚旅行や連込み客でアテられる事の多いのが一番だ。句は果して何れか？

ルンペンに車にSのイニシア

正穂
山三常套的、観念的な手法ではあるが、中七がよく効いてゐるので捨て難い。健康なユーモア味があり、句の中に尊いものを感ずる。

艸二句は過去を反省した形である。で、遊蕩的な雰囲気にはなされた悔恨であるべきで、別府はそんな経験者を澤山作つてゐる筈が一人者が温泉場に来て悔ゆる事は、新婚旅行や連込み客でアテられる事の多いのが一番だ。句は果して何れか？
ルンペンに車にSのイニシア
山三常套的、観念的な手法ではあるが、中七がよく効いてゐるので捨て難い。健康なユーモア味があり、句の中に尊いものを感ずる。
艸二句は過去を反省した形である。で、遊蕩的な雰囲気にはなされた悔恨であるべきで、別府はそんな経験者を澤山作つてゐる筈が一人者が温泉場に来て悔ゆる事は、新婚旅行や連込み客でアテられる事の多いのが一番だ。句は果して何れか？

名勝日本軍爲保存友邦之重
地起見特加保護倘有損毀
者射殺不貸

昭和十三年一月十六日

大日本軍雲崗鎮警備隊

★

午後は洋車で清遠街西の大華
嚴寺と城内陽和街東の九龍壁を
見物した。九龍壁は時價七十万

が将をあたらせる。そして彼と
の間に會話が始つた。

「君達は戦争の時にどうして
ゐたか」

ときく。

「街の金持は皆避難したが避
難したものゝ多くは殺された
からだ。私達は避難するには

みた彼等には皇軍から與へられ
た日給五十銭は恵まれた賃金だ
つたのである。次に参考として

彼等の労働賃金を擧げておこう

農業工賃二十銭、職工日給三十

銭、大工二十銭、左官三十銭、

苦力十五銭。かうした安い賃金

から考へて、彼に與へられた五

十時頃から大同一の料亭と云は
れてゐる「湖月」へ出かけた。

こゝも支那家屋の改造である。

仲居に妓のことを訊いてみた。

四千圓は嘘ではないらしいが、

先客があつて見られなかつた。

若い妓が二人ほど來たが、大同

★★★
柳界
★
展望
★
催

▲一月九日午後一時、松坂俱樂部
部川柳講座。▲九日夜、川維新
春句會。▲十日、二十四日午後
六時半、有恒川柳會。▲十四日
大鐵俱樂部に於て川維三支部合
同新春川柳會。▲二十一日夜、
親友會(花崎)句會。▲二十二日
松坂俱樂部、有恒俱樂部合同川
柳會。▲六三對五一で松坂俱樂部
優勝。▲二十五日阪大川柳會。
▲以上何れも路郎師出席。▲二
月三日夜、三越川柳會、淡路町
居田氏邸に於て開催、路郎出席

消息

▲大坂形水君(大阪府)は商用先
から、「立子」と命名したが藤村
君の長女達子さんと同音になる
ので、又リツ子とも呼べないこ
とはないが森律子を眞似たやう
になるので、自分の一字を取つ
て正子と改名した。ところがあ
とで氣付けば「綴方教室」の豊田
正子の存在を忘れておりまし
た」と父親らしい懺悔。

▲森東魚君(愛媛)から瀬戸内海
の風光を窓外に眺めていたもの
んびり過してると羨しい葉書を
頂く。

▲西田紳樂君(大阪)は一月十一
日新和歌の浦米榮別館から「家
族づれ海も波風立たぬなり」の
句を寄せられた。

▲岩崎柳路君(張家口)は蒙疆支
部幹事として益々ハッキリ、日
曜毎に小川部隊長等と句會を開
催されてゐる。

▲大島壽明君(新京)は左の年頭
吟を送つてこられた。

神酒丈けに緊縛のお元日
▲出口夢詩朗君(大連)が一月二
十一日來阪。路郎主幹の案内で

改號

▲妹尾變人君は八九満。
▲山本雨迷君を本社客員に推薦
▲岩崎松代さんを不朽洞會員に
▲黒木芳泉君を川維竹原支部幹
事に。

轉居

▲鳥生古弗君(不朽洞會員)は吳
市警固屋町十二丁目森川ツギ方
へ。

慶弔

▲富岡巨入君(大阪)の嚴父が二
月六日永眠された。謹しんで悼
む。

社告

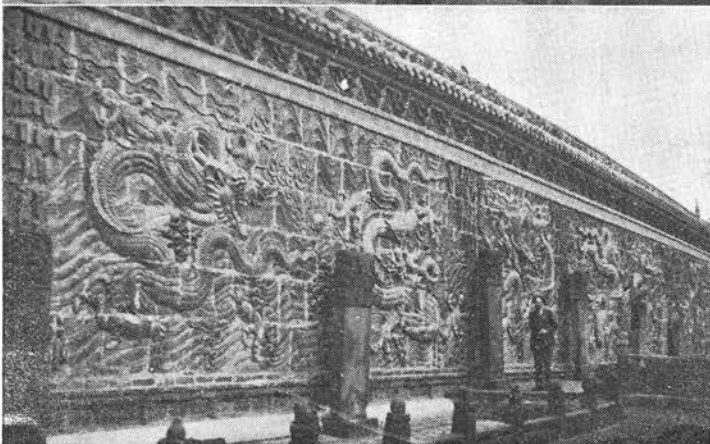
▲岸本水府君(大阪)の母堂は二
月六日逝去された。謹悼。
▲佐二木千隈君(長野)の母堂が
他界された由、哀悼の意を表す
る。



(44)雲崗鎮の石佛の一部大石佛の膝の黒點は路郎主幹



(45)大華嚴寺と路郎主幹



(46)九龍壁と路郎主幹

圓の價值があるからだ。夕べ宿
に歸る。

★

髯が伸びて頤がザラつく。理
髮師を呼ぶ。若い男がやつて來
た。こちらの醫者が着てゐるや
うな白い上衣を身につけてゐ
る。あまり上手でもなさそうだ

金がないので、どうする事も
出来なかつた。そして皇軍の
ために苦力となつて働いた。

日給五十銭もらつたので、却
つて避難しなかつた方がよか
つた」

と語つた。

閩錫山の惡政にさいなまれて

十銭は確かに有難かつたに違ひ
ない。最近では事變前に比して
労働賃金が三、四割方の値上げ
になつてゐるので皇軍入城、日
本人の移住に對しては一般民衆

は心から歓迎してゐるさうだ。

★

四千圓の妓があると云ふので

はない。バラック建のやうな安
つばい座敷で酒杯を手にしてゐ
ても一向興趣が湧かない。酒は
ビールのやうに色が濃くて舌を
刺す辛さである。

「この酒はなんだ」とときく。「菊
正です」と仲居が答へた。自分
は苦笑した。(つづく)

AL-MEL
外傷一切に
アレ性に
家庭常備薬
國産の

選郎路生麻

大浪に乗つた朝陽喜岐對馬
お妾の首にかゝはる長期戰
地下鐵で買ひに來るのも奉仕品
割前へ手の切れさうな五圓札
バス空になる程下りる子澤山
日本に日本一が多すぎる
江南は梅も笑ふに還り來す
インテリは此のリアリテイに虚衝
正直に肋骨見せて深呼吸
共稼ぎ妻の名である長電話
此の際はくこて金が要る
網棚の上に音する五色豆
冷やかな炬燵となつた二日酔
人情だ義理だこいつも貧棒なり
泥付いた掌を一錢へ擴けてる
片言の支那語へ兵は笑ひ合ひ

同 同 同 同 田 同 同 同 同
中
風
葉

同	今治 長野 文庫	同	同	同	尼崎 八竹 正柳	同	同	同
---	----------------	---	---	---	----------------	---	---	---

同



旅費さりに来る視察にも皆慌て
子澤山父の按摩の順をまち
風向きが變つて焚火逃げ廻り
御隠居は指圖炬燵で不自由がり
伸びあがる母を見返す發車ベル
凱旋の便りに野良へ子は走り
伸びる兒へ嬉しい愚痴の仕立替
水ばかり運ばすお客コーヒと文
屋上は親丈に寒い風が吹き
德利大きく酒が冷え切つて
やがてまう漁火だけの島となり
峠を越せば星が増へ行く
いかけもの豊田正子が居りさうな
其筋はみんな斷る事ばかり
サーカスの二ツミ笑つた娘が淋し
拾錢にしてもネクタイ賣切れず
富士・燕ネオンネオンの驛につき
酔ふて酔ふて唯我獨尊
婦人帽横つちようから見てほしい
下駄の音高く興亞の春を行く
英靈へ現場の窓を奉り
鯉に抜かれて悠々龜泳ぐ
叱られて父の元氣が有難し
仲裁はそばで泣く子を抱き上げ
愛されて女ほんこの道を知り
歸還兵家族無言で手を握り
戦功を包み切れない松葉杖
給料日光る一錢子に與へ
ひこり旅早寝と極めてアスピリン
木枯しの野に暖くそうながスタンク
ふこころ手こ、のネオンも飲んごこ
尺八が夢を故郷にはしらせる
小春日に猿の世界が楽しさう
吊革が並んで動く急カーブ
童心を傷つけて行く犬殺し
國策と別なり母のバス嫌ひ
明日買ひに来て下さい三十時過ぎ
茶柱の朝を夫婦で笑ひ合ひ

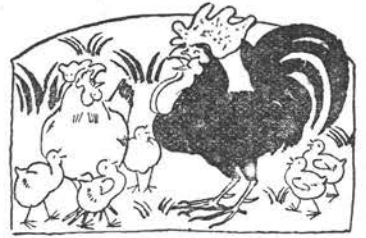
大 同 山川富士
大 同 梶川芳郎
大 同 戸田孤蓬
今 同 渡邊都留逸
大 同 飯尾寄與史
大 同 中原鏡人
大 同 山田南濃路
大 同 米谷松太樓
大 同 都守延象
大 同 東野大八
大 同 河合白外郎
大 同 稻垣正徳
大 同 米澤曉明

電線の二本村中明るくし
河豚を食ふ話へ母の落ち付けず
見解の相違辭表を叩きつけ
ラツシニアワー拔き抜き市電バス
い、聲の車掌金齒を入れてる
陣中の春故郷を語り合ひ
降りる氣の女包を持ち直し
獻金の主係を泣かす裏長屋
長期戦父は禁酒で範を垂れ
ボーナスのあるうち仲良く肩を組み
漫畫描く子に戦線の父があり
お百度に慰められる老夫婦
辭令丈け書記で難役小半年
デパートの地下に用あり夜の茶
まだお粥たべて全快禮に来る
戦友の夢もやつぱり母のこ
一機二機無事に戻つた聲をあけ
福壽草一寸程の影がある
名刺受吊つて無精の初めする
蔣を討つ積りたちまち薪が割れ
金と言ふやつが計畫ぐらつかせ
お元日子のない夫婦寝てしまひ
子を叱る下相談をしてさびし
お元日持薬の味もちこ變り
友あり遠方より来る金借り
宵戎筐の小判が背でゆれ
針運ぶ手がふこ止まるもの思ひ
櫻咲く日も近づける新領地
念佛の猫背火鉢を一人持ち
中風の父凱旋が待ちきれず
さの家も銃後の構へになりきつた
姑の嫌味の中でよく稼ぎ
見知らない娘の目禮が瞳に残り
二階借スキー道具をもてあまし
紙芝居大人の顔を見てしやべり
ボタン一つ月賦のすまぬうちにもけ
朝刊の小説に娘は溜息し
聲派手に張る事變下の紙芝居

大 同 富岡巨人
大 同 阿萬萬的
大 同 増元青秋
大 同 片山鏡水
大 同 野島夢女
大 同 畑田よし江
大 同 西尾 榮
大 同 織井公司
大 同 松枝静波
大 同 西野みづほ
大 同 久松明子
大 同 堀毛一龜
大 同 國弘半休
大 同 黒本芳泉
大 同 佐二木千隈
大 同 小林文月
大 同 高峰柳兒

薄命をせめて鏡へ派手に居る
文樂座話の種に見てかへり
しまひ風呂素顔でかへる共稼ぎ
榮轉の官舎に木瓜残される
母の留守三ツ子をあやす煙草の輪
今日丈は殺生せぬさみねを打ち
慰問品高くさしあけ感謝する
伯母さんの顔に頼母子断れず
進學の子へ自信なき問へぬ親
謹賀新年身も味もなし
賣られ行く牛が鳴いたる霧の中
カンニングする手さばきの鮮やかさ
奥の手を出して落第まぬがれる
保険屋はからかふ客に名刺出し
事務員は頼む用事に君を付け
通勤の女工と見えぬ服を脱ぎ
日向ほこ仔猫昨日と同じここ
清算をして次々人間苦
占領の跡に宣撫の手は伸びる
寝る時は子供に歸る獨り者
船世帯淀で洗てる薩摩芋
朗らかな戦友の便り女文字
白銅を耳にはさんだ乗手も居
戀人に似た女店員を見に出掛け
大阪を見て来た文けが子の自慢
未だ出せぬ仁王銃後へ呼び顔
柳友を思ふ兵舎のお正月
何事も運命だよと悟つた氣
父なる身を勵けました歡送旗

大 同 夷 一笑
大 同 松元蕃兒
大 同 古川幸雄
大 同 澄風
大 同 谷本朱雀
大 同 松田樂人
大 同 藤森小雅子
大 同 須田一葉
大 同 木村比呂志
大 同 清水彌山
大 同 中富南島
大 同 渡師峻光
大 同 淺田右開
大 同 眞下麥作
大 同 竹内市之助
大 同 得能紫浪
大 同 石原健一
大 同 白石紫薇花
大 同 奥田緑水
大 同 木暮公平
大 同 星野秀女
大 同 竹内春坊
大 同 吉津天國
大 同 胡 かなめ
大 同 福田至宏
大 同 村重良句天



武玉川三編研究

(二六)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚 屋
蛭 子 省 二 魚 屋

(451) 犬追ふ物も仕立屋か付ク

東 魚 犬追物に出る衣裳なども、晴れを競ふ事であるから、仕立屋が参加せねばならぬと云ふ意味であらう。

秋の屋 犬追物には一定の服装が有るのでこれを行ふ時には、装束を新調するために、仕立屋が必要なのであらう。

省 二 素襖直衣で馬に乗り、犬を追ふもの故、仕立屋の必要がある。故に實法式に關する著書が色々ある。

(452) 連の出る内雞を抱く

省 二 この連は例の悪友と思ふ、雞抱くは息子の深謀。

東 魚 鳴かせぬやうに抱き上げてゐるのか。どうもよく解らない。

秋の屋 何の連であるか。遊里へ誘ふ悪友とも思はれない。

省 二 私はその悪友と解してみたのだが

(453) むかしの櫛の餘る隠れ家

省 二 昔と今の境遇異變。狭い部屋に大きな櫛は始末に困る。

東 魚 言葉の云ひ廻しが巧いと思ふ。秋の屋 富有の生活をした人の末路で、哀れにも又寂しい光景である。

(454) いつの間に刀をさして夷講

東 魚 商人が愈々發展して、遂に帶刀御免となつたのであるが、流石に年々の夷講は嘉例として行ふので、招かれた人のホ、

ウと驚いた場合であらう。

秋の屋 帶刀御免とまでは考へられない。唯夷講であるから客席へ刀を差して出たものと思ふ。

省 二 色々酒興が楽しめたもの故、これもその一つではなからうか。

(455) 待わひのむしられ物に櫻草

東 魚 來べき人を待ちながら、待ちわびて櫻草をうかとむしつてしまふ。恐らく鉢植の櫻草であらう。

秋の屋 野外の情景ではない歟。如何に待たるとも鉢植の櫻草を坐るとは、餘りに心無しである。

省 二 私には、やはり、鉢植物と考へてゐた。むしろは大げさな言葉であるが、おもちやにした位に軽く解してみたい。

(456) 波風の相應に立男ふり

省 二 男振りがよくて女關係があり勝ちで、問題が相應に起る。

東 魚 波風の相應に立つは面白い云ひ方である。一波瀾まき起すべき面ラ魂である。

秋の屋 女出入でも起しさうな男振といふので、面魂などいふと、何か悪人らしく聞える。

(457) 見事に濡て母へ傘

省 二 母へ傘をさしかけ、自らはぬれて居る娘。
東 魚 實際ある事であらうが、見事に

聊か月並具に思はれる。

秋の屋 孝行を賣物にするやうに思はれて善い感じの起る句でないと思ふ。

(458) 向うの軒の近い正月

東 魚 松をたて、又たわゝな竹など立てるので、通路も狭くなつたやうに感ぜられる。それを「向うの軒の近い」と詠んだのであらう。

秋の屋 吉原遊廓の宵合せの松飾は、一層この感が有つたであらう。

省 二 お説通り。正月氣分横溢。

(459) 屋根板の飛ぶ冬の白川

東 魚 白川は京都の白川であらう。冬は比叡嵐が猛烈にくる。飛根板の飛ばされる事もあらうと思はれる。荒蕪たる光景が思はれる。(奥州の白川としても解せられはする)。

秋の屋 和歌では木枯を、陸奥白川の關の景物とされてゐるから、この句も奥の白川であると思ふ。

省 二 御尤。宗祇が白川關にて詠めるに

「風に思ふ都の青葉かな」と。武玉川に陸奥をよめるが少いから珍しい。然し京都としても通じはする。「風や小石のこける板庇」蘇村。

(460) 若葉に成て御園隠るゝ

省 二 若葉が茂つて社殿が一しほ、奥深く床しく感ぜられる。御園を引く姿も隠れるかの如くに。

東 魚 御園を引く處は社殿の端近くであるから、前解の如きであらうが、「御園隠るゝ」は、ちと表現が不十分だと思ふ。

秋の屋 櫻樹の多くある、京都地方の社寺であるらう。

(461) 見もせぬサてげぢくを追ふ

省 二 見もせぬ文、それがゲヂくみたいなものであらう。

東 魚 主は、全くあきらめものだ。

秋の屋 文の本人が自身に來ても、猶且拙艇あつかひにされて、開封せぬ文を突展される。

(462) 人知れずこそ面白い科

東 魚 罪な事だが、人知れずこそ面白い事をした。人が知らぬだけ、尙さら面白さが深い。

秋の屋 有夫姦であるらしい句意である。

省 二 科である以上、人に知れたら事もの。

(463) 俗て拍子のぬける柴の戸

東 魚 風流な事だと佗び住居を羨しく思つたが、案外其主人の俗なのに失望したといふので、小咄に風流な家に通じかゝつてみると、中で主人が、ア、錢が欲しいと云つたとあるが、その趣である。

秋の屋 賛成。

省 二 風流は物欲しさうなものと云つた人がある。また難い哉。前述の小咄を一興に記してみよう。「ある松原を通り掛り、只見れば片ほとりの庵室に三十ばかりの男たゞ一人机に向ひて經を讀て居る體に、旅人ア、あのやうにして暮したら無念無想でさぞ心よい事であらうと、うらやましう思へば、庵室の男ずつと出て伸をしながら、ア、金がほしい」(安永版鳥の町)

(464) たゝかれる人も扇も其日切

東 魚 扇で折檻された場合か。叩れた人も以後來ないし、扇ももう遣ひものにならない。

秋の屋 主君の勘氣を蒙つた家臣で、即日浪人するのであらう。

省 二 「人も扇も」と列べたところ、手腕なのであらう。

(465) わかめの波へ投ふる松明

省 二 和布刈の神事。謡曲「海布刈」に詳し。片手に鎌、片手に松明をもち、海に入つて和布を一鎌刈る。「一鎌であと白浪の神事なり」大晦日に行はれた事は「和布刈遠し王子の狐見に行ん」(素戔尊)。此神事の後に和布採取が始まる。

東 魚 門司の和布刈神社の大晦日の、め

かりの神事、刈る和布は一鎌だけで二鎌刈れば、直に溺れ死ぬといふので前記例句も明解出来る。

秋の屋 前解に盡されてゐる。

(466) あぶなく乗て通る馬醫者
東 魚 馬醫者はするが乗るは不得手だ。

危ぶなげに自分の馬に乗つて治療に行く。或は病馬を治療に連れ戻すのに、乗つて行くが危げに乗つて行くのであらう。

秋の屋 治療する爲に連戻ると、病馬にその醫者が乗るのであると思ふ。

省 二 病馬に乗るので、「あぶなく」が明らかにきく。

(467) 松風に氣の付力ぬ剛力
東 魚 颯々たる松風に琴の音を思ふ風流は、剛力にはない。或は事珍しく思はぬので剛力には松風の音も何とも思はれぬと云ふ場合であらう。

秋の屋 馬耳東風で何の感じも無い。
省 二 馴れつことなつてしまつて。
(468) 殖すに仕廻ふ母上の金
省 二 殖えるどころか、心細く減つてゆく。息子にしばらくは嬉しくもある母親の心持。

東 魚 殖えずに終る。結局殖えさうになると息子に持つて行かれてしまふのである。
秋の屋 躰繰金などいふものは、餘り多く殖えない上に、野良息子に絞取られて、餘すところは幾干も無い。

(469) 聞よりはやく母は呪
省 二 例へば子の病氣などに際し、他から聞けば直にその呪をしてみる母親。
東 魚 子供が頭など打つた場合、チチンブイ／＼御用の御室なんと云ふが、そんな場合にもとれる。

秋の屋 子供の病氣などに、他より善く利く呪があると聞いて、即時にそれを行ふとである。
(470) 萩の上からやせる蚊の聲

東 魚 萩の上に秋風を知る(と云ふ歌があつたやうに思ふ)頃になると蚊もやせる。云ひ廻はしに巧さがある。

秋の屋 萩の上風が薄寒く吹くと、蚊の聲も次第に瘦細る。

省 二 萩風が吹く。蚊の短き命。

(471) 百夜を越して傘か干る
東 魚 百夜通ひの間は、雨雪にかゝはらず出るので傘の干る間もないと云ふ位だつたが、其後は雨などには一向出ぬから、傘は干てゐるであらうと云ふ變短の句かと思ふ。

秋の屋 前解の如くに相違ないが、技巧に過ぎて興味の薄い句である。
省 二 「百夜」の二字の興で作られた句。

(472) 縁へならへる螢見の膳
省 二 縁先で涼を入れつゝ螢見の膳につくは一興。(縁が正し)。
東 魚 涼味を感じる。

秋の屋 琵琶湖畔の旗亭の光景と思はれる。縁は(たるき)で、座敷の外にある板敷の通路ではない故、縁の當字である。
(473) けふからは帯の短い菊の花
東 魚 菊咲く頃ともなれば、衣服も漸く厚着になるから、帯を短く感じると云ふのか。

秋の屋 陰暦の晩秋であるから、霜も漸く降り初めて寒くなるので、前説の如くに相違ない。
省 二 私には判らなかつた。「けふからは」の限定に随分苦しむだ。
(474) 江戸のぬかりは夜のあみ笠

東 魚 これも六ヶ敷い。万事に手落ちのない江戸ではあるが、夜は編笠は入用はなからうに、廊通ひにあみ笠を被つたとは、と云ふやうに想像してみる位である。

秋の屋 何故に「江戸のぬかり」である歟。解釋に苦しむのである。

省 二 「ぬかり」は手落ち。不必要なものを被ぶるとは手落ちだといふのであらう。
「編笠の頃には土手も馬燈」

(475) 山伏の一間置に低く吹
東 魚 一間置は一間置の意とみてよろしからう。軒毎に立止まつて貝を吹き鳴して行くが、高く低く吹き鳴らして行くのを、一間置と特にわざ／＼、さうするやうに云つたので、事實は自然に一間置になつて行くのであらう。

秋の屋 私には山嶽に登攀する場合と想ふが平地を行く時のさまであらう歟。
省 二 街の場合と思ふ。間は軒に同じと辭典にある。

(476) 臆に棒を投る大門
省 二 四郎兵衛番所の一風景。臆の道切は不祥なりと云ふ。其場合は石か棒を投げるか、水を注ぐべしと。
東 魚 臆が道を切ると來べき人が來ぬといふので、大門でそれでは困るから棒を投げたので、前説の追記に。

秋の屋 大門の番所には、棒が手近にあるに相違ない。
(477) 手を引た女別れるにはたつみ
省 二 行旅で手を引いてゐた女と別々に

なる。(手を引き合つて居るのだから女仲間か)。

東 魚 若い女同士の場合と想像する。

秋の屋 女同士の方が風情がある。

(478) 西日の町に捨て有る人
東 魚 辻番の布子は西に入り給ふで、辻番の事をかう曲つて云つたのであらう。

秋の屋 「辻番は生きた親爺の捨所」といふ句もある。
省 二 古川柳を研究してゐないと判りにくい句。

(479) よし原て聖の佛の凄く成
東 魚 葬式くづれに吉原へ繰込んだものの、聖骨に成る、今頃は焼けてゐるだらう佛の事を思ふと、聊か凄くなつて酔もさめる心持ち。

秋の屋 喜び有れば悲みあり、遊興費の頭割りも、又一つの心掛りである。
省 二 殊勝だ、人の性は善。「死花が咲くとは今日の大一座」などと洒落のめして居る手合もありはするが。

武玉川研究(一月號)正誤表

頁	段	行	誤	正
四	一	二二	呑む也	や
四	二	一五	ぢさき	ち
五	一	一九	施薬院	末
五	三	四	末は	

温布にエキホス

感冒、肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、齒痛、乳房炎、月經痛、腰痛、火傷等……は

エキホスの好適症にして迅速・確實・安全に奏効し使用法も至極簡便なり

一〇〇瓦 二五〇瓦 五〇〇瓦 包裝



C-27

★日本柳壇百人撰★

2598年の金字塔 自選一句

ABC順

煮るものが煮え前線に感謝する
春の草代議士などに踏まれるな
嘘・嘘・嘘木魚の音もさうひびく
蔭膳に栗飯の栗多いこと
春三日風の中なる曲馬の子
旅の夜具故郷へ遠い匂する
腹が出て男盛りを意識する
人生に苦はなし思ふだけのこと
いのちいのち。待つかひありて人に逢ひ
捕虜の腫の中にも懐しさ見ゆ
開拓のころにはずむ日本刀
算盤のとれぬ話だ断はられ
初島田笑つてばかり娘の行儀
北風の衝立になるお父さん
腹這ひの父のホーズをそのまんま
あの友は護國の鬼か夢の涯
戀のはて老いし別居の竹箒
子供の繪日本の旗が描ける腕
秋いつか一家の寢覺定まりつ
花咲けどころさびしきつとめかな
最悪の場合は君よりする氣
九 段 下
頭を坂に鎮まる御靈慕ひつゝ行く
玩具箱のその中でねむつてみたし
出征の兄に代つた杵の音
慰問する舞台が狭い愛國歌
大阪に來て日本の力知る
征友戰死花なきを案ずるの地點
蟋蟀はふたり暮らしを寂しませ

東京市 阿部佐保蘭
大阪市 藤生路郎
同 藤生路乃
京都市 桑 岳
静岡市 榎田竹林
同 榎田柳葉女
横濱市 福田山雨樓
東京市 富士野鞍馬
同 古谷盈光
青森縣 後藤蝶五郎
廣島市 濱田久米雄
大阪市 橋本緑雨
東京市 堀口祐助
大阪市 姫田夕鐘
仁川府 池田可宵
大阪市 石田沐天
松本市 石曾根民郎
今治市 石崎柳石
横濱市 磯部天邪鬼
山口縣 磯部孔雀
張家口 岩崎柳路
西宮市 岩崎蟬古
長野縣 金井有爲郎
上田市 金子吞風
名古屋 加藤文醉
鳳凰城 菊川泰平樂
東京市 川上三太郎
同 河柳雨吉

灯が一つ心の塔に明滅す
勝つて行くみよ東海のうたのまゝ
皇軍へ感謝のあまり酒を断ち
重役もすつかり空の旅に馴れ
朝寒を同じ言華の垣隣
出征の父を持つ近隣の子を見て
夕焼のあたり父あり子の軍歌
今や征く人ありホームから軍歌
長男はこんな歩く七五三
一日を終つてわが家のわが寢床
兒の指でつゝかれてゐるのど佛
居留地の床屋がスパイだったとさ
馳けろ／＼月に心をのぞかれた
鍵五つ怠け／＼ろを叱咤する
子の病氣詭びる氣持で醫者へ行き
月光にあしたまた勝つ日章旗
小作法節博立つた手に買はれ
生活をきいてもかせる金がない
銀行で藝者ほんとの名で呼ばれ
妻の目が老しと見しはおかしけれ
小火納まつてはつしと燐寸を誰かすり
皇軍の銃が憩へば詩が生れ
盛返す手がまだあるか宿替し
ひまわりの陽を追ふ姿猛々し
二十年早く經て／＼鯉鱈
添乳にも露營の歌になる銃後
サラリーに馴れ切つてゐる身に不安
ピヤホールぼつたり秋の灯がむなし
さりながら一度は意見斥ける
親の嘘子の嘘樂しきかな親子
デパートの慰問袋で氣がとがめ
風のあと千人針にふたりほど
東洋のものみな伏せり菊花節
洗面器笑へば笑ふ顔が浮き
勞はつてやれば軍馬は嘶いて呉れ
軋かれたる水奔出の際ねらふ
もう一人の僕は平氣で嘘を云ひ
應召をうらやむ列にわれも在り

大阪市 河野夜王
同 岸本水府
青森市 小林不浪人
布能市 小西落丁
東京市 熊澤車山
松山市 前田五健
東京市 三浦太郎丸
同 三宅巨呂平
青森市 宮本夢一文
兵庫縣 水谷鮎美
大阪市 森 雞牛子
新居濱市 森 東 魚
東京市 森井荷十
大連市 森崎佛心
東京市 村田周魚
今治市 長野文庫
大阪市 永先芽十
兵庫縣 長崎柳秀
長野縣 中島紫痴郎
横濱市 中野懷窓
高知市 中澤濁水
大阪市 西田艸樂
名古屋 丹羽のぼる
静岡市 落合樂飄
大阪市 小田夢路
同 小川百雷
同 岡田某人
同 奥村萬柳
仁川府 奥村丹路
大阪市 奥村丹路
同 近江砂人
京都市 大島黃子朗
同 大島無冠王
新 大島清明
東京市 齋藤丹三郎
松山市 酒井大樓
東京市 坂本柿亭
大阪市 崎山 明

まる／＼と戦地の寫眞笑ひたり
父を裏ひて
人間一人足らぬ 大都市
始發出紙屑一つすでに在り
ばんざいの片一方の假繻帶
日章旗風あつてよしなくてよし
慰問品勳八等にきいて見る
熱情を採つて手紙讀み直す
眼をやればそこに富士あり日本無事
口先や筆先でない友もある
何を挟んでもうまい鍋うまい
拾ひ屋も上海だより唱ひつゝ
子の手品鼻の脂の要る手品
ひとり飲む酒だ淋しさ寄つてこい
貸借もなく生き甲斐は春へ座し
盛り場へ聞える喇叭下手と云ひ
夏秋と武運が續き迫る冬
秋の陽に遍路の行手汽車がゆく
運轉手に扇さかさの銀世界
婚約へ庭樹も揺れぬ晝しづか
傷心のゆきずりに葉をむしりとり
ステツプに芝ボータブルのねちを巻き
いたわりつ慕ひつ子なき夫婦老ふ
一升瓶酔うて擔げば音がする
出世してからの便りは嫁の文字
戦死した馬の毛これがなあと云ふ
一人來て次から二人來る所
諦めは葛湯の湯氣の淡きに似
脚蹠眼にしんみりうつる四十過ぎ
橋立や二つ海ある松のさま
達觀は目睫の間に麥青し
際される飛行機を支那まだ仕入れ
大寺のずり雪 大悲往還す
家根・家根・都會は空を忘れたり

石川縣 櫻井六華
神戸市 三條東洋鬼
東京市 品川陣居
大連市 佐々木三福
秋田縣 澤田有石
浦和市 清水美江
東京市 清水良祐
大阪市 白石朝太郎
大阪市 杉原大研子
神戸市 根元紋太
大阪市 須崎豆秋
名古屋 鈴木可香
神戸市 鈴木九葉
大連市 高橋月南
大阪市 高橋かはる
長野縣 高峰柳兒
東京市 高島玉兎朗
大連市 高須啞三味
同 田邊幻樹
同 田中空壺
京都市 辻井京二
同 塚越正光
高知市 筒井水魚
大阪市 上田朴堂
八幡市 上野十七八
今治市 和田仙海
横濱市 山本斗酒
大阪市 柳 大門
東京市 柳 三門
松山市 矢野蛇の腰
新 安井八翠坊
金澤市 安川久留美
名古屋 吉田水車
人撰である。巨豪の疊を衝いて新進の勇躍の如何に素派らしいかを見よ。

映 畫 に

望 郷

Pepé le Moko

監督……………ジュリアン・デュヴィヴィエ
原作……………探偵 アシエルベの手記
脚 色……………ジャック・コンスクン

配 役
ベ・ル・モコ……………ジ ャ ン・ギ ャ バ ン
ギ ャ ビ イ……………ミ レ ユ・バ ラ ン
イ ネ……………リ ヌ・ノ
カ ロ ル……………ガ プ リ エ ル・ガ プ リ オ
爺 ツ あ ん……………サ テ ユ ル ナ ン・フ ア ブ ル
レ デ……………シ ャ ル パ ン
ス リ マ ン……………ユ カ・グ リ ド オ
ビ エ……………ジ ル ベール・ジ ル

解 説

ストオリイはアルヂエリイの探偵アシエルベの實説によつてデュヴィヴィエが原作者と協同して執筆し、音楽は「港の掠奪者」その他、佛蘭西第一流のジャンソン作曲家ヴァンサン・スコットとアルゼリイの人と思はれるモハメッド・イグルブーシヤンが作曲に當つてゐる。

この映畫はデュヴィヴィエとしては「モンパルナスの夜」「地の果てを行く」の系統に屬するものであるが、歐洲各地で素晴らしい當りをとり、「舞踏會の手帖」に先立つてデュヴィヴィエの眞價をアメリカ映畫界に認めさせたものであり、従つて、ユナイテッドのウエンジャー・プロは、シヤルル・ボワイエ主演、ヘディ・タマール共演、ジョン・クロムウェル監督で「アルジエ

川柳を観る

リイ」そして、この映畫のアメリカ版を最近完成した。

物 語

佛蘭西の植民地アルゼリイの首都、アルゼリイは、悪が跳梁を恣にするべき絶好の舞台だつたこのアルゼリイのカスバと呼ばれる一區劃は、その獨特の建築様式と、そのまがりくねつた迷路と、その堡壘の様な構造とで

侵すべからざる惡の巢窟となつてゐる。アルゼリイの警察當局は、全身武裝して、再三このカスバを襲ふのであつたが、その度毎に失敗の苦汁を舐め、今迄に既に五人の犠牲者さへ出してゐた。

前科十四犯——強盜三十件、銀行襲撃三件のベ・ル・モコがこの暗黒街の王者であつた。彼は常に身の廻りに配下を引具し全カスバに集喰ふ惡黨一味を統べてゐた。そして彼は、彼にひたむきな思慕をよせるモリス・土人の女イネスの許に起居してゐた。

だが、このカスバを一步でも外に踏み出すとベは直に逮捕される事は、彼自身もよく知つてゐた。彼の配下の中、彼が弟の様に、子の様に愛してゐるビエロ、強慾、大力のカルロス、彼が盗んだ寶石を一手に捌く「爺つあん」、その他ジミイ・マツクスは常に影の如く彼に従つてゐた。

ベがフランス本國ツローンで銀行を襲撃して、このアルゼリイに迄逃れて來てから二年、今の彼には、この狭い牢獄の様なカスバに肌の黒い女を相手の生活に疲れ果てゐた。

警察當局は數々の失敗に、今度は手法を換へ、ベをカスバから誘き出して街で捕へんものと機會をねらつてゐた。そしてベをカスバから下ろす役目としてレデスとスリマンの二人の手先が選ばれた。



詩 人 複 眼 (10)

高 鷲 亞 鈍

國民兵の辯

杭州に居る時に、色々な方面で、最近内地の消息が傳へられ、統後國民の緊張振りは事變勃發直後に比して甚しく弛緩してゐるといふやうなことがよく聞いた。それは然し比較的平穩な杭州に居た間では別の方面から考へれば大國民としての應揚さであるとも解釋され、腹立しさと俱に許容する氣持もあつた。(傍點筆者) 以下三行略

しかし、今、この荒涼たる戰場の中を走る感慨としては、再び輕薄な國民に對する憤りが胸の底から湧き上つて來るの、禁じ得なかつた。(傍點筆者) (夢と兵隊より)

兵隊さんが昨今ほど必要でなかつた時代に徴兵検査を受けた爲に、僕は不幸にも國民兵に廻され、今では肩身の狭い思ひをしてゐるのであるが、鐵砲を擔いで戦線に出られる兵隊さんになれないと考へると、これで夜も眠られん程齒痒い氣がする。内地に居ても地震大火や風水害で何千何萬と昇天する人間の生命なら、生命を的の戦争で護國の鬼に化する方が本懷である。

まして日本の兵隊さんは全く幸せなものだ。一旦國家に捧げた身體なるが故に、妻や子供の面倒も、兩親始め親類縁者達のいざこざに煩はされずに一切の責任や義務や負擔までうつちやらかして置いて、他人は何とも言はないんだし、そんなことを潔く抛つたらかした方が實めて貰へるんだから、有難いものである。▽だが國民兵はさうはいかんのであつて、却つて平時の時の責任より二重三重に擴大され、兵隊さんの慰問袋に入れる靴下やら、襯衣、猿又、バット、飴玉に到るまで調達したり、獻金は兎も角、毛布を購入して獻納したり、尨大な公債消却の一端にも貯金しなければならなかつたり、應召兵の送り迎へや白衣の勇士慰問やら、出征家族の家の世話、或ひはいつ何時飛んでくるかも知れない敵機のために防空演習をやらされたり、一寸喫茶店へお茶を飲みに出かけても「見える敵より見えないスパイ」のボスターを讀んで、ハツと周圍に警戒の眼を向けねばならず、實に以て統後の國民もなか／＼たいいてのことぢやなく、大國民の應揚さを持たない僕など、これで氣が小さいといふのかしらん。▽ビチ／＼した働き盛りのところが撰りすぐつて戦線に行き、あとに残つてゐるのは老幼男女





忘れてしまった。
ガビイが歸つて後
ベベはスリマンに
彼女の事をしつこ
く訊いた。スリマ
ンは眼を輝やかし
た。今こそ自分が
待ちあぐんでゐた
機會が到來した事
を直感した。

この間に、手先
のレヂスは警察へ
行つてベベ逮捕の
一策を授けた。レ
ヂスはビエロの許
に、ビエロの母親
がフランスからこ
のアルゼリイまで
訪ねて來たが不幸
病氣になつたとい
ふ偽りの手紙を送
つた。

ビエロの情婦アイシャは、ビ
エロが街へ行つた事を知つてゐ
た。しかし歸つて來たのはレヂ
スだけなのを知ると彼女の不安
はやりやく募つて來た。そして
ベベの許にこの事を告げた。
ベベは一瞬、すべてを了解し
た。

彼は暴力を以てレヂスを暗い
隠れ家に連れ込んだ。
「お前はビエロの仲好しだ。そ
のビエロが街へ行つて歸つて來
なければ、お前としても心配だ
らう。歸つて來るまで俺達と一
緒に待つてゐな」
そしてレヂスを取巻いたのは
「爺つあん」カルロス以下ジミ
イ・マックスだつた。後暗い處

ぬるい態度にしびれを切らした
巴里の警視廳は、應援と警備の
ために一人の腕利きの警官を送
つて來た。しかしアルゼリイを
巴里とは勝手が違ふ、彼が一同
をせき立て、その夜の中にカ
スバを襲つたものゝ見事に失敗
してしまつた。
この騒ぎの中に、若く美しい
フランス女ガビイはたゞ一人と
り残されて呆然としてゐる時、
見廻つてゐたスリマンに助けら
れて、傍らの土人の家へ押し込
められた。そこへ現はれたのが
ベベだつた。警官達と闘つて彼
は右の首に負傷してゐた。
だが、この騒ぎの中に、忽然
と降つて湧いた様な美しいガビ
イの存在に、ベベは傷の痛みも

倒れかゝつた自動ピアノが一時
になりはじめて更に凄惨の氣は
漲つた。

だが、やつと追ひつめて、射
たうとしたビエロの身體は呼吸
絶えて、ぐつたりとその場に倒
れかゝつた。カルロスは彼の手
を握つて、レヂス目がけて一發
……二發！
復讐はなつた。

然しビエロを失つたベベはも
う以前のベベではなかつた。朝
から晩まで、彼は酒に浸つた。
酔つて來ると彼はこの狭いカス
バに閉ぢ込められてゐる自分の
苦惱を爆發させた。街へ行くん
だ！カビイに逢ふんだ！はた
の者の引き留めるのも聞かず彼
は轟然と街へ向つて駆け下りて
行く。それと知つたイネスも彼
を街へやつては殺すやうなもの
と後を追ふ。

街の警察にはもう手配がして
ある。
——ベベが酔つて下りて來る！
さつと警戒網が張られた。だ
が戀しい男を警察の手に渡すま
いとイネスも必死だつた。
彼女はベベに迫りすがると、
「彼女が家で待つてます、行か
なさい！」
「彼女が家で待つてます、行か
なさい！」
と偽つた。ベベは黙つて踵をか
へすと家まで走り歸つたが、勿
論ガビイの居る筈はなかつた。
だが、彼が又酒を飲まうと家を

あるレヂスは生きた心地とて
なかつたが、どうしても逃げる
事は出来なかつた。
× × ×
ベベはガビイに全く心を打た
れてしまつた。忘れもせぬ巴里
の思ひ出、しかもガビイの語る
所によれば、ベベの子供時代を
送つた場末の巴里はガビイにと
つても出生の町だつた。二人は
それからそれへと巴里の事を語
り合ひ、やがて立上ると、二人
はしつかりと抱き合つて巴里祭
のやうに我を忘れて踊り狂ふの
だつた。
ガビイに對して熱狂的な慾求
を感じたベベは、彼女から明日
又必ず來るといふ言葉を得て有
頂天になつた。だがその一伍一
什をイネスは見えてゐた。彼女は
堪りかねてベベの前に姿を現は
すと嫉妬に狂ふ目を燃やして
「ベベ！」
と叫んだ。
その時そのカフェエの入口に
たゞならぬ物音がしたと思ふと
横腹に手をやつて躊躇乍ら這入
つて來たのはビエロだつた。彼
は深傷を負つて鮮血に染つてゐ
る！
「ビエロ！」
ベベは走り寄つた。
「レヂスは何處だ！レヂスは何
處だ！」ビエロはビストルを手
にして叫んだ。ベベはビエロを
抱いてレヂスの處へ連れて行つ
た。レヂスは必死になつて部屋
中を逃げ廻つた。
ベベとカルロスに兩脇から支
へられてそれを追ふビエロ！
鬼氣迫るこの場景に、レヂスの

ることは否めない。そこで戦線
に出てゐる最も生きのいい連中
の分を引受けて二人、三人前の
働きをさせられるといふのが僕
など若手の國民兵であるが、さ
ういふ晝間の身心過勞から、ホ
ツとしてカフェエや、オデッサ
で騒いだり、呑んだりするのが
何だか、麥や、土や、海や、花
やらの兵隊さんの辛苦に濟まな
い氣がするんである。なにあに、
戦地に征つてゐる兵隊さんだつ
て、一部分は魚を釣つたり、ボ
ートを泛べたり、場所によつた
ら、カフェエでもシネマでも、
享樂してゐると聞いてゐる。そ
れは悠々自適して勇氣を養つて
ゐるんだと考へたら不思議は
ないが。▽思へば兵隊さんは敵
に向つて突貫あるのみで、それ
以外に何も無いし、元來身は鴻
毛よりも軽い筈のものであるけ
れど、僕ら國民兵は天上天下に
眼を配り、四方八方馳けつりま
わり、身はます／＼いよ／＼重
くるしく犂がれさうになつても
共には大阪からも嘆聲あげるよ。

歌舞伎座を詠む

|| 鴈 治郎 追慕劇 ||

姫 田 夕 鐘

「道行」

勸進帳

義經千本櫻
忠信をせり上げさせる鼓の音
藤太の台詞事變色もちとまぢへ
片戀と知らずお里のかひ／＼し
推盛になると氣品を失はす
權太郎してやつたりの面がまへ
呼笛へ權太の呼吸のきれ／＼や
狐火で追手をまいてこますなり
ほんとうの姿狐の物語
月夜偕行我
軍卒の心得たりと語り出し
十郎の艶な姿を籠に乗せ
發狂へ裾野の雪の降りつものり

うん／＼氣張つてそれら身に餘
る責任や義務やらを持ち應へな
ければならぬし、うつかり音
を上げて參らうことなら、どん
なことで非國民呼ばはりされる
とも限らない。死ぬ程辛くとも
死んだ方がましだと思つても、
こゝはどうでも生き抜いて、が
つちり銃後を守つてゆかねばな
らんのだ。兵隊さんも僕達も、
うからやからは凡て君の爲め、
國の爲め盡す赤誠皆同じだ。▽
いまや國をあけての戦争なれば
生命を的に戦ふのは決して決し
て兵隊さんばかりぢやない。戦
地にあれば戦地にあつて、内地
にあれば内地にあつて、滅私報
國の烈々の魂は一人残らず日本
人は持つてゐるんだ。銃護の國
民を許容するも許容せんも玉井
伍長に叱られたからといふて、
吾々國民兵が、そんなに卑下せ
んならんぢやうか、舊友火野
葦平よ。貴様もどえらい豪くな
つたなあ、原田種夫の感慨と
共に大阪からも嘆聲あげるよ。

出た時、ガビイは約束を違へず
べべの前に現はれた。

二人は楽しい一時を過ごした
スリマンはイネスの嫉妬を利用し、ガビイとべべの逢曳を止めさせてしまはうとした。

彼はガビイに、べべは警官のために射殺されたと告げた。ガビイは失神した様になつて、その後二度とカスバへは上らなかつた。

べべは待つて居た！ 必ず来ると約束したガビイを待ち焦れてゐた。だがガビイは遂に姿を現はさなかつた。

不安と焦慮の餘り、べべはカスバの外れまで来ると眼の前には近代建築物の櫛比する近代都市のアルゼリイが展開してゐ

る。

港にはフランス行の巨船「オラン市」號が横はつてゐる。べべはつか／＼と船に上つて行つた。だが不幸にも、まだガビイの姿を見出さぬ前に、スリマン外二名の刑事に包圍されてゐた。

嫉妬に狂つたイネスがスリマンに密告したのだつた。

べべは逃れられぬ運命を悟つて、靜かにスリマンの手錠を受けて、そして再び棧橋を下りて行つた。「オラン市」號は今や岩壁を離れてゆく。べべはちつと見送つた。すると突然甲板に出て来た女、それはガビイではな

いか！
「ガビイ！！」
べべは聲一杯叫んだ！しかし

「許して！べべ、許して！」

その時、耳をつんざく様な氣笛の音に、ガビイは耳を覆つて船室に歸つて行つた。

ガビイは、べべが呼んだ事もべべが生きてゐて現に自分の前方に立つてゐる事さへ知らずに思ひ出のカスバを去つてゆくのだ。

船の姿は段々と小さくなつて行く。ちつと見送るべべの目からは熱い涙が落ちた。

そして、刑事達の目を忍んで不自由な手で懷のナイフを取出すと、ぐさつと、自分の腹を刺した。

倒れかゝるべべを見たイネスは走りよつて彼を抱き乍ら叫んだ。

「許して！べべ、許して！」

望郷の觀を

須崎豆秋

死もおそれなすく戀を追ふこと切れてゆく網膜に飛ぶ鵲人間の叫びのこして散る惡惡の華カスバの街は鉛色望郷の視線は海へ灼きつきぬふるさとの唄はほろりとするカスバ郷愁のうつろごころに黒き酒

麻生アト

望郷の念に憐れな前科者肩書へどうにも成らず腹を切り戀人の寶石丈は見逃しぬ出帆の汽笛名残の聲を消し蟻の巢の様なカスバに人が住み

楊井二南

筋を追ふて

罪惡の權化カスバのいさよさまさまの人種卑しき媚びを持つ巢窟の中は晝なほ灯を圍み土に寝てたゞれた夢を戀ふカスバ晝日中不敵の牌を弄び嬌笑に住めば都と成り果てし警告のノックバトンを繼ぐ如し

貪慾の掌に寶石の値がきまり秘策練るカスバの地圖に行き詰り撃てば撃ち返す度胸が躍まり危機を知る男屋根から屋根へ去る何處をどう抜けたか首魁無事な顔傷を得し男退路をわきまへて運命を與へる美女の瞳に惹かれ財寶は求めず戀の瞳に射られまた／＼きもせず俠賊に湧く好奇大膽を賞するか女逃げもせず親友かあらず賊對名刑事あけすけに話す刑事が憎まれず色仕掛敵は手中にある誇り敗北の兆し女の名を探り友を賣るその表情が白々し洞察は確か殺意をひさげ行く逃亡は許さじ恐ろしき微笑嵐の前の靜けさを吹くハローモニカ死は近しカルタの嘘を指摘され搦みつゝ殺氣の中の脂汗裏切を罰する顔が皆靜か殺戮の伴奏ビョノ狂燥曲狂はしき男卑怯を未だ知らず絶望の酒も味方とならぬ日々

べべ哀れ愛撫を向ける友がなし復讐は果せど空虚募りくる街を去る形相酒氣もしたゝかに狂奔の前に冷たき法が待ち斷罪を知らずや足は驕らにひきとめる情婦の嘘に救はれし目覺めたか情婦を抱く目がうるみ一難去つて又一難と云ふ女愛慾の虜暗黒街は晝語らひは巴里故郷の名を指され約束の固き女の瞳は燃えて望郷の愉悅自由の海へ向き逃走を希ふ仲間に託す便怒りさへ湧かず失意にうちしほれぶよ／＼の女泪の歌に伏す首尾を待つ長さの豫感凶と知るその手には乗らぬ怒號が襟をとり詰問の酷さスラ／＼實を吐く脱出の決意さへぎる道がなし柔順に捕縛を許す俠氣の宿望は成れり容赦のない手錠絶望の鐵扉が胸を吸ひつける斷ち切れぬ手錠のまゝで伏すあはれ密告の女愚かを泣きくづれ



川 ★ 協

▼新に川協の手で撰ばれた日本柳壇百人撰は頗る好成績だつた。御盡力を願つた方々の御好意を深謝する。第一回は時間的關係から、昨年度の百人撰を主體とし、その他を理事の推薦に俟つた。次回からは評議員に謀つて一層の完璧を期したいと思つてゐる。

▼和田天民子君主宰の柳誌「川柳手拭重復品相當價にて御分譲を乞ふ」

大阪市東區南久寶寺町四丁目 岡 恭平

柳俱樂部（東京）が「俳詩」と改稱された。

▼本協會名譽會員前田五健君、本協會理事酒井大樹君等の手によつてオール愛媛の柳誌「川柳愛媛」が近く刊行される運びと

さんかつの

うまさ寝てから

思ひ出し 仁兵衛

おまかせ
さんかつ
お許しなすべ



街に住めば

高橋かほる

年始に兄の家へ行くと兄曰ク「どや好え川柳でけるかえ」のん色紙と短冊に書いてや

嫂曰ク「やアぼんあんだ川柳で好エ儲してなはんねや」歌舞伎座か蠟船へ一つべん連れて行きで……

嫂の認識不足なる事ヨ……よう云ひません。

のため割愛したので諒恕を乞ふ▼庄万よし君の大阪都民新聞では二月十五日號を南區出身出征將士慰問號として刊行されるさうだ。



東京だより

銀座 座 鳥

川柳俱樂部改題のこと

和田天民子博士を總帥にいたゞく川柳俱樂部が、新年號から「俳詩」と改題、そして川柳の名稱を廢めて俳詩と稱すと宣言したのが東京柳壇へ話題をなげかけてゐる。

川柳は個人の名稱で、詩の名稱でない、といふ説が柳壇の一隅にあるのは、久しいことだが川柳の名では社會から輕蔑されるといふので、その名を改めようといふのは珍らしいことかも知れない。

た方が、川柳の淨化運動になるだらうとは、一般の觀測らしい川柳の名に嫌になつて、その名を改めるのは、關東地方の殊に東京を中心とした地方の因習らしい。古くは明治四十年頃、安齋一安氏等の新川柳から短詩へを皮切りに、故人高木角戀坊氏の川柳から草詩へ、近藤鈴ノ坊氏の寸句へを中古に、最近では大村新輝氏をおやぢと稱するむさしの一派の風詩、今又茲に俳詩が出来たが、短詩のそれを除いては、みんな變り榮を見せ呉れてゐない、といふのが、短詩などは内容が川柳とすべくあまりにかけ違つたものになつたので、必然的に餘儀なく短詩を名乗つた點がうかゞへるが、其他は内容は從來のまゝなのだから、必然性がないことは

言ふまでもない、従つて名稱にも作品にも社會性などは生ずべくもない、笑ふべきである。

認定選者のこと

川柳人協會が豫て事業の一つに數へてゐる選者公認の問題に對して、(尤も川協のは全國の問題だが) 昨年末から東京柳壇の有力吟社「きやり」「川柳研究」「柳友」の三社が協議して居たが、どうやら目鼻がついたといふことを聞いた。

それが何ういふ風になつたのかはまだ發表されないので詳しくは判らないが、仄聞するところによると、三十何名とかの選者が認定され、その顔觸れの中にはどうやらいかゞはしいものもあるらしい。東京柳壇如何に多士濟々とは言へ、何處へ出しても恥かしくないやうな第一級の選者が、いきなり三十何名も居るとは思へない。

きやり、川柳研究、柳友から代表者として選者認定の議にあつた人達も選者にならうとするから、三十何名も認定しなくてはならなくなるのだと、穿つた説をなすものもあるが、又一方には、どうせ句會の選者なのだから、句會へ出られ相な顔ぶれだけを揃へたのだよと、獨合點の説を吐くものもある。さうかと思ふと、これだけの顔觸れを揃へるのは並大抵の努力ではない、よろしく認定された選者諸君は感謝しなければいけない、などと腹爪らしいことを言ふものもある。

夢一佛復活のこと

何は然かれ一言居士の多い東京柳壇のことだから、やがてその顔觸れが公表された曉には、嗚かんかんがくがくの論に、湧き返ることと楽しみにしてゐる。「川柳きやり」の一威力だつた海野夢一佛氏が、誌上にも句會にも姿を見なくなつたのは、柳多留全集がうまうま行かなかつた頃からだから、もう五、六年前のことだつた。

夢一佛氏が率ゐてゐた作句研究會の諸君の内、きやりの社人に残つて居た數氏も、いつの間にか、消えてしまつてゐたのが、きやりの二月號で見ると、作句研究會を復活させて、夢一佛氏のカムバックを期すことになつたといふことである。カムバックした夢一佛氏が、城正光氏の例もあることだから、きやりも夢一佛氏も、そのところをうまうやつて貰ひたい、どうだつていふことかも知れないが、老婆心とやらを加へて……。

五人組のこと

東京柳壇に五人組が出来たといふから、江戸時代の五人組のやうに柳壇の世話でも焼くのかと思つたら、どうやら飲んだり食つたり、遊んだりの仲間らしい。求真會といふのが川柳の眞を探索する集りでなかつたのと同様、どうも門外漢には解し難ることはかりである。それにしても、花柳界の五人組だの七人組だのといふのは綺麗でいいが川柳界の五人組などといふのはあまり綺麗ではなさ相である。いつそとりものの集りなら洒落て、いいが、などと言つたら撲り倒されるかも知れない。何しろ物凄い集りらしいから……。



松坂俱樂部

會員募集

あらゆる趣味のお稽古場

手はさきから奥義まで
氣輕く、楽しく、御上達

- お稽古目
- 長聲 津唄 華尺八 曲踊 八曲 能樂 小鼓
- 常磐 唄元 舞尺 謡曲 小鼓
- 鳴物 謡曲 小鼓
- 茶本 道楽 華料 華道
- 川柳 俳句 裁理 道學
- 柳句 裁理 道學
- 松坂レコード 道學

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生

擔當

御申込は 七階 松坂俱樂部 部へ
電話(代表) 三〇三番

松坂屋

大坂 日本橋

★天地人五客は前號發表★

兼題 白衣

長崎柳秀選

戦功を白衣に包み君凱旋る
墨二 氣が付けば白衣の天使のそばに居り
松太樓 現役を免除と白衣淋しがり
鮎美 こゝは病室白衣の夢はただまろし
喜山 背の子が白衣の父に怖氣たり
としみ 宮様と氣付き白衣は起き直り
巨人 更生の意氣は白衣の義手義足
二南 打ちつけて見たい白衣と視線合ふ
しづ子 出かしたと白衣へ故郷の父が来る
五一 勵しを秘めて勇士の松葉杖
歌仙 戦線へ歸へる白衣へ口惜しがり
村句茂 日本の水が白衣の舌にしむ
榮一 戦報へ白衣の腕は捲くられる
斗風 盲目の白衣が偲ぶ日章旗
南風 母と知る白衣の腕が胸へ来る
曲人 戦功を白衣で包む顔やさし
變人 赤ちやんへ白衣の勇士向きをかへ
雨亭 黙々と白衣の勇士隅にゐる
柳太 戦傷は云はず白衣の戦地談
水客 日本が強さ白衣に光るもの
長平 傷兵の闘志に軍醫泣かされる
靜城 盡忠にもえて白衣の乙女征く
穂夫 原隊へ歸還叶つた白衣ぬぐ
明坊 白衣また戦線に立つ日をのぞみ
房子 前線を誓ふ白衣へメスふるひ
素天 白衣もう生活戦を考へる
朴堂 大丈夫ですと白衣の腕を撫し
萬象 満腔の感謝を浴びてゆく白衣
恭二 慰靈祭白衣片手で弔詞讀み
草水 入城のニュース白衣の腕を撫し
斗士 觀衆の拍手に白衣拳手の禮
阿鴻 看護卒白衣に端唄聞かせてる
兼題 土 大島無冠王選
結局は故郷の土と生きて行く
柳笑 お座敷の壁をさすれば土こぼれ
如雲 薄倖の男へ土の香りする
雨亭 一握の土に感謝を忘れかけ

奉仕隊士は重たいものと知り
白面人 斬壕は土の香りと血のほひ
一 波 虚弱兒を故郷の土に預けたり
夕鐘 喜びの足は祖國の土を踏み
利生 濡めつばい土へかほそき聖が延び
ライト 盟邦の翼を迎へし土の色
いわを アキラ 鼻に土付け斥候兵の鋭き眼
半疊 友はたと倒れし土の一握り
光路 土掘れば土に希望が湧いて来る
三澤光 土に寝て險に浮ぶ母の顔
亞鈍 指折つて土の香を戀ふ停年期
しづ子 土を喰ふ支那農民が敵でよし
二南 ふるさとの土へも詫びる心持
形水 土を蹴る軍馬も遠い故郷を持ち
巨美 師走など知らず蛙は土の中
鮎美 戦友を埋めた土へ捧げ銃
無名 どす置き土へ餘つた力瘤
夜王 土黒々と大陸へ春よみ還る
木桃 領地となる前夜の土を兵進む
靜波 綿着て故郷の土の踏みこゝち
萬よし 土に伏す第一線も秋の色
柳笑 大陸の土になる氣のいとま乞ひ
雙樹 土に親しんで長男無事にゐる
兼題 兵隊 水谷鮎美選
兵隊を送つた朝の出勤簿
恭二 食堂の眞ん中へ兵隊腰を掛け
形水 霜白し工兵隊の呼吸白し
勝治 軍用鳩歸らず兵の瞳に薄暮する
六花 日本兵隊さんで拜まれる
柳笑 兵隊が笑へば抱いた子も笑ひ
鏡々 兵隊を迎へる山の驛の朝
絹雨子 ついて来る子を兵隊は笑つてゐ
三若子 綴方兵隊さんになるといふ
曉明 兵隊に髪を伸ばしてたのしめり
豆秋 兵隊にしますと靈に誓ふ母
一 兵隊が街行く匂ひ吸き乍ら
貞雄 日の丸になり切つてゐる兵隊さん
孤蓬 兵隊の一人力士のよく目だち
柳秀 兵隊の子を持つ父が國旗立て
頑童 兵隊が泊ると町の名を貼らせ
落丁

髭部隊どの兵隊も同じ顔
新水 兵隊の通る堤へ兒が並び
紫波 日本兵隊であり名を惜しみ
靜々 支那で遭ふ兄弟舉手をして別れ
廣太 兵隊さん父の脊中で寝てしまひ
柳太 戎橋今日兵隊の嬉しい日
雨亭 兵隊の強き祖國に母います
心月 歸還する兵の腫を射る波頭
連城 兵隊と動物園は日本晴れ
亞鈍 兵隊の心良民知つてゐる
悟空 兵隊と馬と港へ陽が昇り
秀太 録音で聞く兵隊の靴の音
一 明月へ瞬きもせず立つ歩哨
栗風 兵隊の身なり眞近なり
斗風 童顔の兵隊侯の弟だ
南濃路 月落ちた橋兵隊の動く影
二南 兵隊の無事を祈れば振り向かず
白虎 兵隊さんどんな型でもよく寫り
風葉 兵隊の兄の手紙へ皆な寄り
いづむ 九段で會はうぞと兵隊閣へ消え
夜王 兵隊が好きときつぱり日本の兒
默平 兵隊の二年針持つ術も知り
喜彦 兵隊の決心送り返へすもの
兼題 家賃 辻井京二選
十圓の家賃はまれの旗たてる
としみ 大男家賃が二つ滞はり
かほる 家賃出し家主の顔も知らず住み
三澤光 家賃少し早く届けて十二月
艸樂 家主の太つ肚を知る赤襪
清人 月給と家賃無邪氣に子は眠り
變人 家賃半減米醬油をおいてくれ
里十九 家賃頂だきますと頼で来る
緑水 家賃開き在所の客は首を振り
歌麻呂 戀婿は家賃のいらぬ家に住み
美根子 家賃滞納とてもお神は口達者
亞鈍 算盤は家賃の事を先に置き
草水 主婦の不平受けて家主判を押す
靜城 家賃集めに植木鉢を離れ
一 御近所が家賃にふれて困はれる
阿鴻 零落は家賃を知るが始めなり
曲人 あの家も家賃拂へぬ聲と知る
菊人 いゝ世辭を持つて家賃を取りに来る
白彦 得心の家賃を呪ふ日となりぬ

白足袋をはいて家賃で食ふ暮し
はるを 家賃集めに男一匹使はれる
同 家賃も拂はず雨がもる雨がもる
正徳 停年に近く家賃の要らぬ家
萬象 寝るだけに家賃の高い共稼
漫歩 井戸端の會議家賃が高すぎる
落丁 披露宴家賃も實家で足す噂
春浦 地下足袋を干して家賃を拂つて来
風葉 江戸辯の家賃へ聲は落して居
斗見 倦怠期家賃の高い愚痴も出る
新水 落籍されてからの家賃を考へる
百方 借りる氣へ世間話で家賃聞き
長平 今月の家賃へそくり足して呉れ
兼題 乾盃 小川百雷選
乾盃の中に開える愛國歌
柳笑 フラッシュへ乾盃をする手が揃ひ
紫々 酒のない儘のグラスも乾盃し
鋭々 乾盃のグラス微かな音を立て
一笑 乾盃をする猛將の背が低し
正徳 爆音の眞下乾盃する勇士
はるを 君送る乾盃留守は引受けた
艸樂 乾盃の幹事の聲に寂びがあり
萬よし 乾盃にすねてか一人席のまゝ
半疊 乾盃のしぼし静かにゐる一座
と 乾盃の昇れ多くも宮殿下
豆秋 乾盃の中に祝電またも来る
木桃 乾盃へ背廣の御掛けして立つ
形水 わだかまりなく乾盃の聲が合ひ
二南 乾盃へ一度に動く椅子の音
浅女 グラス持つ手が感激にふるへる
六花 乾盃をして部隊長國訛り
いさを 乾盃がすんで四五人また坐り
水客 乾盃へ大食堂の椅子の音
朴堂 嬉しさに乾盃の酒こぼれ落ち
利生 乾盃をよるばぬのも混るなり
萬象 乾盃の腰に日本刀重し
落丁 乾盃へ軽い會釋の赤襪
恭二 乾盃の酒をうるさき男酌ぐ
神人 乾盃へつゞく歡呼の聲に更け
秀太 乾盃へ隅の男も腰を上げ
黄太 和やかな室乾盃の音がする
河鴻 乾盃へ下戸も上戸もなかりけり
としみ 乾盃へ泣ける若さがたのもし



川柳塔

路郎選

大阪橋本緑雨

ハイキング範で行くかさふざけて居
外交員風ないここに二人立ち
別荘の話マスクの中で言ひ
酒癖に日本人かと言はれて居

大阪高橋かほる

初春芝居兵隊さんも見て居はる
幕合に神戸の人と知れるなり
合唱は露營の歌になる銃後
奥さんが雑きんで拭く支那火鉢
蕾から椿は二十日餘り咲き

大阪奥村丹路

正月をまさしく小人閑居の圖
茫然と雲を見雲の動かぬ日
町に住み町に降る雪淋しめり
乗客はみな横顔を持つてゐた

張家口岩崎柳路

胃酸加多亭主安樂椅子に居る
ドル買かスパイか蛇の瞳の毛唐
まぎらかにジャポンを割つてゐる二人
片笑くほこちらを見せたプロフィール
支那芝居髯をはづしてお茶を吞み

○ 兵庫縣 水谷鮎美

出雲屋で父たり夫たり子たり
抱いた子が寶船をあて、嬉しがり
神の灯を信じマツチの火も信じ
二役の悪がきかない旅役者
冬の雲うごかぬ窓へ雀くる

大阪姫田夕鐘

呼々二十有五歳櫻ちりゆく
話すはきに聞くはきに鼻がつまつて來た美談
戦時の眞只中にエノケンのロツバのミ
寒菊につひに及ぼす花鉢
ピアノの思へらく頭のわるいお嬢さん
じり台父がテストになつてやり
親子三人五衛門風呂の湯氣の中

出征市場没食子

手榴彈焚火の中で崩裂し
壕掘りに我も刈田へ使役に出
戦帽も軍袴も破れ年の暮

名古屋 吉田水車

一寸アメリカへ行く友の身輕さ
盆栽のつほみのまゝに明ける
賣れ残り斜に向いて本を読み
木枯や馬力の馬の眼の疲れ

大阪府鳳町 姉尾八九満

妻病む三句
父さんがたいためしなり愛想云ふ
男手の水屋へ物のは入りかね
魚屋でない庖丁へ太い鮭
霜おりて乞食のねぐら音もなし
月給は安しネオンの灯はまぶし
散髪屋はさみの音で眠らせる

大阪須崎豆秋

臥てゐても卯酒ならこんで起き
立歩哨、馬場さいへさ零度以下
座箱の二萬圓これも大阪でのなし
着ぶくれたのが自用車へ押し込まれ
うさん屋の椅子が足りない國防婦
ダイヤなご見てブラッ、ミ待つてゐる
南無妙法蓮華經、マスクして
双葉山四敗

大阪後藤青兒

人聲が絶えて戦線落葉する
戦友の墓標も立てた支那の土
半襟へ叔母さんの事姉の事
世界中ゴチャ／＼言ふて十二月
出る時の喇叭を吹いて迎へられ

松本 石曾根民郎

舊き友來て雪の灯を見出しぬ
父ミ子ミ孫を揃へて冬籠る
風呂敷にちひさき戀はめぐみつ、
たのしみはふへすも灯がはいる家
屋根雪へ飯炊く煙がさかす晝

大阪中西おさむ

聞いて欲しい話でぐる繩のれん
春の夜の春の女ミすれちがひ
欠伸した妻を睨んで欠伸する

I 君の結婚一句

今宵の月を二人つきりの月にする

吳鳥生古弗

女ミ侮つてか家賃は滞り
夕刊へ今朝の續きの記事がなし
鐘靜か、惱みに答ふごさ響き

二つ三つ植木を出して陽を眺め

大阪 正本 水客

健康児はだかて寫す胸を張り

相宿のうちきけぬまゝ雨になり

近道を教へて客を送つて出

老人に席をゆすれば飽をなめ

豊中 黒川 紫香

しやつくりへ算盤玉が一つはね

柝の音へ蜜柑半分膝へのせ

土方さも見えず背廣のお朔日

口丈けがせわしく動く白鼠

大阪 丸尾 潮花

月はただ白し渚のさくら貝

漫畫家の賀狀春から笑わせる

蔭膳の雜煮に父の祝酒

こつほりが社の鳩をまごつかせ

大阪 大坂 形水

汽車の窓工場へ黒き列續く

團體が乗つて鮮人起こされる

夫への不満バタ／＼掃除する

宵戎マントの釦ちぎれて來

大阪 岩橋 双虎

嘴の青さの中にある道理

満員車軍需景氣が怒鳴るなり

統制の餘波をうけたる仲居にて

大空は風があるらし池の雲

大阪 野本 呑水

四十ふのはぎ半分はおいて去に

極樂往生それがたのみのくらしなり

福運に迷ふ笹々々の波

勤勞奉仕婦女中に仕舞はさせ

御用心下さいそんな犬を飼ひ
辻褄が合はぬ律義な嘘を云ひ

大阪 岡田 某人

地べた這ふ風を知つて靴磨き

子の話子の無い人をはゝからず

事志さちがひ事務所でペンを拭く

サイレンで喰ふのも銃後なればこそ

巡禮へ子供がかぎを閉めに來る

小器用を買はれ居残る用があり

寒行の列へ信號赤さ出る

張家口 岩崎 松代

酒場から出れば矢つ張り父であり

父である事に氣がつき二日酔

さの子もさの子も大學を出しただけ

○ 仁川 池田 可宵

悪友のよい半面を知つてやる

商用のスキー列車へ乗り合せ

スケートで轉んだ痛さ堪へたり

軍事郵便にはばからぬ娘の名

兵庫縣 長崎 柳秀

年賀狀奥様さあるはづかしさ

草鞋穿きさも遙々言ふ姿

さの船も往く所があり煙を吐き

好きな妓の他人行儀がもの足らず

退席の考へてゐる他人の金

大連 佐々木 三福

征衣古り母國は遠し雜煮餅

敵襲も無く元旦の雜煮腹

聖戰三年皆鉢巻を締め直す

憎しみの矢は重慶を十重二十重

統制の片棒しかさ擔ぎ上げ

廣島 濱田 久米雄

云譯へも一人殖えたやかましき

落着けば湯氣が立つてる長火鉢

原稿紙火種へ腰を上げかゝり

活花に春の陽差しを見つけたり

春うれし百米に雲雀がる

出征 月原 宵明

立哨の動けば動く晝の月

暮近き車站に新年糧食品

君國の無き寒さなり自衛團

今乾した襦袢に頭叩たかれる

武裝解除銅子兒五ツ六ツ出る

突撃は一億萬の聲さなる

見た様な顔もあるなり歸順兵

明日知れぬ身の正確ないびきなる

遺品の中の麥さ兵隊

今治 渡邊 曉童

コ、アーの香のあたゝかき幸

思ひ出はすぎ行く消ゆる雲のごさ

自動車は前へ整列してならび

吾に家あり酔ふてねるかも

愛媛縣大洲 今川 棕影

結び目がさう／＼腹を立てさせた

大廣間二對一の火鉢なる

苦勞したなご軍馬撫でてやり

電線へ正月からの風の糸

愛媛縣 橋本 克海

子の駄父にいささかさからうて

マスクより洩れる瞳の笑ひをり

非常線マスクはすして會釋さす

留置場の窓を初陽に開けてやる



募集句

一路集

鳥居 正光選

鳥居は支那風に書けば華表、又は雞栖であつて、その起源に關しては、印度のトラナが名稱形式共に類似してゐるので、それだとする説もあるが、日本上代住宅を繞る垣に設けられた門を、上代住宅に起源を有すると言はれる神社の門とすべきであると言はれてゐる。

私達が鳥居の「課題」によつて川柳するとすれば、鳥居そのものの實體を詠ふよりは、鳥居を神格化して詠ふ方が、より川柳し易いと思はれるが、この集句では鳥居の實體を詠つたものが多かつた。況して鳥居風といふやうな芝居繪の名稱へ持ち込んだ句などは一句もなかつた。これは課題に忠實な投句家諸君だからであらう。

入選句にそれ／＼短評を附したから、没の憂目を見た諸君は、短評の中から自句の落選理由を會得して貰ひたいと思ふ。

官幣社驛から鳥居だけが見え 春集

この官幣社は別格官幣社を省略したものとして、何處かに斯うした情景の神社があるものであらうが、私達の共感を得るには端的に神社の名を詠み込んだ方が、より効果的だつたであらう。

失禮な姿で雀鳥居に居 文庫

この句主の感じ方は、直接私達の胸へ反映して来る、失禮など云ふ表現が、私達に／＼な幻想を描かせることも役立っている。だが座五の鳥居に居はもう一考して貰ひたかつた。

引潮の鳥居で撮すハネムーン 葉光

宮島の鳥居、鳥居の下で寫眞は類句が多かつたが、その兩者を兼ねたのは、この句

主の老巧さからであらう。
三度目の石が鳥居へ乗つてくれ 風葉

鳥居へ石を投げる禁厭も類句が多かつた。そしてそれらは石を投げるのか、乗せることにのみ拘泥はつて、石を投げる人の氣持になりきれないがこれはその氣持になりきれない。

鳥居までタクシーで来る裾模様 白外郎

神前結婚といふ文字は句面になが、それをこの句から感じさせることが出来るのだから、句主の意圖するものは成功してゐる、たゞ惜むらくは座五の裾模様は既成品の感じを興へる、何故なら角隠しでもよし高島田でもよしといふ工合に、裾模様でなければならぬにまで至つてゐない。

大鳥居仰げば冬の雲ながれ 斗風

前述の意味で、この句の冬の雲も動くといつても流れるの洒落ではない、だがたゞなんとなく句主の立つ位置を感じさせてゐるのが良い。

大鳥居裏に寄附者の名を刻み 曉明

この俗惡な寄附者への諷刺としてなら結構だが、まさか見たまゝではなからう

降る様に鳥居の鳩がみんな降り 謙南坊

のどかな社頭の一風景としてうなづけるものをもつてゐる、たゞ上五に對應して座五の降りは下りの方が、句面が引立つやうに思はれる。

鳥居から玉砂利きつく踏みつける 潮花

神域への敬虔さがにちみ出てゐる。これは私達日本人でなければ味へない境地である、それなのに神社の前を通る時、脱帽敬禮する人は案外少ない、この頃東京では宮城前、靖國神社前を通過する電車やバスはそれを報らせて、脱帽敬禮をさせてゐる。

戦捷に鳥居をくぐる旗の波 一龜

銃後風景の一點描として、斯うした川柳もあつてよいと思ふ。

屋上の隅に小さい鳥居たち 紅多呂

近代のビルの屋上に祭られたお宮は、科學を無視したやうだが、そこに日本人の精神がたゞよつてゐる。よく見かける圖がこの屋上の小さな鳥居の前に額づく洋装斷髮の娘さへある。

大阪に住む子が寄進した鳥居 南邊路

成功した息子が郷里への錦衣だが、それを詠ふべく子ではちよいと力が弱いと言はなければなるまい。

朱の鳥居はかなき戀をいくつ見た 孤蓬

鳥居をバックのランデブーと來ては、かなき過ぎて哀れである、いくつ見たと問ひかける句主の感情は共感を得るには、いささか遠い。

別れ際鳥居のかげを踏んで立ち 水客

待つ人だつて鳥居の影を踏まないことはないが、別れ際に踏んだそれが何となく情緒的に感じられるのは、私ばかりであらうか、まさかそんなことはあるまい。

鳥居から其冗談は止しにする 曉童

神様の門である鳥居際から俄然靜肅になつたのは、恐らく團體遊覽の客でもあらうか、描き得て居る。

赤鳥居お稻荷さんはよく流行り 鏡水

神様は否定しないが、迷信は嘲笑する態度は現代人の通性である。その心理へでアツビルすることが出来るとは言へないが、第三者らしい皮肉として下品でないことが良い。

花嫁は鳥居前から歩かされ 一笑

歩かされる、花嫁には氣の毒さが感じられる、従つてこの歩かされには同情がこもつてゐるとも言へる。

忌の明けぬ友達鳥居除けて待ち 軸

ペン先 青兒選

ペン先に個性はつきり見直され 綠水

すらすらとペンで百圓書いてくれ 一笑

三錢のペンで大きな事を書き 春巢

ペン先が丸うなつてゐる銃後 潮花

初仕事ペン先新と取替へる 紫香

毛筆をペンに換えさす若旦那 風華

ペン先に云はせ彼女は氣が弱い 市多樓

働いて／＼ペン先捨てられる 石鐵

書置へ宿のペン先錆びてゐる 水客

ペン先を置いてゆつくり取る受話器 松太樓

ペン先の無心は父に内設です ライト

ペン先が素直な心知つてゐる 曉童

始末書へ恐れ入つたペン先の先 芳郎

ペン先が又ひつかゝる無心狀 佳鳴

受取へペンを振り／＼やつと書き 一龜

ペン先で喰ふのに菊地寛があり ヨシ子

ペン先を翳る三男父がほめ 夢女

決死隊今宵限りのペンをはせ 鰐洞

ペン先の刺が氣になる晝さがり 明子

Gペンだ驚ペンだなぞと英習字 同

ペン先の錆へ我が窓暮れてゆく 斗風

ペン先へ銃後の便り意氣高し 同

むかつて書くペン先はひつかゝり 巨人

ペン先の音さら／＼と秋深し 同

ペン先を替へて日記の第一日 文庫

ペン先を耳に算盤自信あり 同

ペン先を替へて嬉しい繪封筒 葉光

ペン先へ勝氣を見せる女事務 同

(五)留守番のペン先を置くベルの音 風葉

(五)ペン先がインクの底に届く音 水客

(五)子の書いたペン字嬉し慰問文 富士

(五)ペン先へよほど突つてゐる心 曉童

(五)ペン先の記事も涙の凍る跡 神樂

(人)Gペンに變へて恩師へする便り 潮花

(評)恩師に對する敬愛と懐かしさの情はペン先を取替へた事に依つて完全に表現されてゐる。

(地)ペン先で食ふ意地盛さこそねてゐる 半休

(評)「男なんかに負けるもんか」「安月給取りなら嫌よ」と自信の強い女性は年々多くなつて來た。そして自らを不幸に導いてゐる。世の女性諸君願はば前車の轍を踏む事勿れ。

(天)慰問文書くペン先へ母の智慧 鰐洞

(評)「兵隊さん有難う」と子の書く慰問文には又母の智慧と眞正が加へられて完成する。銃後に於ける母子合作の此の慰問文こそ頼もしき極みである。

用紙は原稿用紙又は投句箋のこと
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

新
春
句
會
(大阪)

於誓得寺

風入紅夢斗吞一路
多呂裡風水龜郎
夕松一い巨紫水霞
鐘雙笑を人香客乃
文栞白青銳潮梨ア
柳子兒々花子ト
鐵い銃鐵豆某敏白
つむ人心秋人郎人
里亞琴沐か萬孤
十九純水天るほの蓬

兼題「兔」

かほる選

兎狩り男ばかりの手が揃ひ
 兎ですかと子の首巻を見直され
 親兎子兎 春の陽に遊び
 捕まへた兎の耳の温かさ
 郊外に越して兎すゝめられ
 飽き性に構はず兎殖えてゆき
 兎の子買ふて北濱から戻り
 動物園兎は隅へほととかれ
 副業へ兎の事を聞いて来る
 雪降れば兎の遊戲幼稚園
 兎の眼から童心を取戻し
 兎の目ふと愛人の瞳を感じ
 人學校の兎汚れたまゝ太り
 (地)おから付けた口をもぐぐ白兎
 (天)初夢は兎の餌を買ひに行き
 兼題「餅 花」 路
 餅花がうれしくうごく初對面
 富士 琴泉 巨人 葉光 文芳 いづむ 豆秋 里十九 風葉 白柳子 八歩 夢裡 白柳子 吞水 鮎美 鮎美 郎選

餅花に深水の女きれいすぎ
餅花が觸つた髪は氣にかけず
餅花と倒れたまんまねてしまひ
餅花の下 大福帳はさら
餅花の壁に中村歌右衛門
餅花へキレイにつかふ客が来る
餅花の下で去年の禮を云ひ
餅花へ祝戦勝もぶら下り
餅花がゆれてる無事な春があげ
餅花の下で喫ふてる支那煙草
末つ子を抱いて餅花ひつばらせ
餅花のそぐはぬ壁を淋しがり
開演のベルに餅花くらくなり
洋髪の妓も餅花の下に座し
餅花がととも氣になる高嶋田
餅花の部屋で長唄聞かされる
餅花のこの枝だけが淋しすぎ
餅花へお手々が届きうれしがり
餅花のリヤカーにゆれて行く暮
赤ん坊の目へ餅花の位置を替へ
餅花を飾りおふせた新世界
買ふて來てさて餅花のつけどころ
餅花の下で春着の襖とり
餅花の鯛は今年もはね上り
炬燵から見る餅花へ灯が明い
餅花の下に綺麗な新年號
餅花の下で女の甘い嘘

敏郎 鋭々 鐵心 葉 白柳子 豆秋 鮎美 夕鐘 紫香 白柳子 巨人 八步 紅多呂 白柳子 粒子 斗風 白面人 粒子 紅多呂 風葉 紅多呂 潮花 いづむ 夕鐘 銳々 萬の 潮花

餅花によつばと暇と見られたり
餅花も飾り今年は儲ける氣
大丸鬘にとゞく餅花
(人)丹前で立てば餅花鼻へくる
(地)餅花にもう春らしい立姿
(天)餅花の下で今年のメをする
(軸)餅へ逢へる辻占氣ぜはしく
餅花へ電話のかゝることしきり

席題「大 晦」

大晦日片附けすぎてどぢをふみ
持つて來てくれるのを待つ大晦
大晦日もう一本は空けてゐる
大晦日ネズミにしても落ちつけず
大晦日來年こそはと腕をくみ
風邪氣味の風呂へ行くのも大晦日
旗出して置いて元旦寢る心算
南京の鐘が聞こえた大晦日
また一つ買ひに出て行く大晦日
日めくりを貰ふ當して大晦日
大晦日丁稚の風呂は明けかゝり
氣を利かせ利かせと叱る大晦日
お隣りはもう風呂へゆく大晦日
大晦日まだあの店は起きてるか

席題「小 判」

封印を切つて男の意地を見せ
千兩を十錢玉で買ふて來る
小判など並べて家系話される
餅花の小判へ春の風があり
時價なんぼするか小判を掌で秤り
我さんで小判に頭なでられる
落した小判 鎖鑰の音がする
兩の掌に小判かゝえた夢が醒め
かけ聲も荒く小判を笹へつけ
舞台から小判一枚落ちてくる
大江戸の春は小判の夢にあり
女形小判の禮へ手をつかへ
鎖鑰の小判が財布によれてゐ

(五)紫のふくさ小判の色にあひ
盲目の娘小判の艶を考へる
慶長の昔の色で小判居る
母の名で今日献納をする小判
別に眼を射るほどでない小判

白面人 潮花 文芳 潮花 水客 亘人 かほる 八歩 里十九 松太樓 葉 白柳子 夕鐘 某人 一龜 万的 同風 秋選 同風 同風 白面人 鏡々 吞水 琴泉 いわを 同水 万的 豆秋 風葉 白柳子 一龜 選 同路 亘人 孤蓬 鮎美 華光 万的 水客

(人)小判小判戎の笹を曲げてゐる
(地)獻金の小判ふくさのまゝ出さ
(天)骨董屋小判に綿を敷いてやり

席題「手眞似」

睡今丸みを知らず形となり
常連の手眞似マダムに睨まれる
呑む話手眞似を妻は見逃がさず
皇軍は手眞似で話すことになれ
眞剣な手眞似を歩哨見せられる
片言のあとは手眞似で旅がすみ
掛取りを手眞似でそれと知らされ
女將の手眞似名取の線となり
手眞似までして故人を呼び戻し
手眞似まで父そつくりにしてしま
手眞似もう銚子の數を忘れてゐ
高座からうまく手眞似は酒を飲み
言ひにくい事は手眞似に任せをき
激戦を手眞似で話す軍事談
金持つてゐると悟つた妓の手眞似
手眞似して妻はふすまの影に立ち
前借りをして來た眞似は手を合は
手眞似する後へ課長立つて居る
菊五郎を手眞似で母は語り出し
(佳)手眞似でもちやうど相手手字も讀めず
手眞似して大きな嘘をついてゐに
夕焼へ美しすぎる娘の手眞似
啞の子等うどんを食べる手眞似を
手眞似から誤解が解けてよく笑ひ
(軸)手眞似して既に大陸に疲れた
手眞似く興亞の春に五郎じみ

席題「愛嬌」

愛嬌へ親しめるらし新店員
愛嬌はニッコと笑ふコツがあり
愛嬌があつて國婦の幹部です
慈善鍋愛嬌のない顔で立ち
愛嬌を忘れてゐたりパスガール
表情に惹かれ愛嬌はほめてゐる
愛嬌に女將は酔つた二三杯
お愛嬌と云ふかくし藝牙えてゐる
別嬪と云はず愛嬌はほめてやり
賣物とする愛嬌にトゲがあり
重顔をひきつけてゐる猿の藝

夕鐘 粒九 同子 文芳 同鈍 水客 吞水 同呂 紅多 櫻選 同天 夢裡 豆秋 潮花 粒子 白面 斗風 鐵心 かほる 紫香 吞水 巨人 一龜 敏郎 八歩 同鐘 夕人 某蓬 孤人 銃笑 一鐵 鐵心 水客 万的 天選 某香 紫泉 琴泉

白外郎

徒の手紙へ切手添へて出し

足の手紙へ切手添へて出し

葉を一つ落して秋は近

香も父親らしい。

白外郎

怪我をした中には這入るエキストラ
エキストラ脚が映つたばかりなり
エキストラ揃つて日向ぼつこをし
エキストラ雲を見てゐるのもまじり
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

尼崎句會 (尼崎)

師走、高島田、請求書

算盤の上にも師走現はれる
當にしたボナースわたらず一時雨
成行にまかせ師走を越える氣の
病人へ其の儘迫る師走なり
警笛のはげしい下に住む師走
年の瀬を甘くて飲んだ酒じやない
子の美談師走になつて世に知られ
氣のきいた師走も知らず都會の灯
表情もなしに師走の月が落ち
裕福な師走を寒さだけと知り
師走だけ小供になつてみたいなり
結立のすうつと歸れぬ高島田
婚禮の日に間に合はす高島田
白骨の對面となる高島田
母にだけそつと尋ねる高島田
普段着に嫁ぐ日近い高島田
かんざしは母の形見の高島田
一本の遅れ毛もなし高島田
高島田キヤツチボールをよけてゆき
高島田 戰友間を喜ばし
高島田似合ひ舊家に所望され
高島田かるたへ動く手の早さ
高島田結べるが義姉となる人か
落ちぶれた身に状態しの請求書
請求書だけはきちんと入れてゐる
請求書奥様の分と別にされ
請求書赤字の前にひろげられ
本店へ廻してしまふ請求書
片隅へ置いたは拂へぬ請求書
おごとと云つた分までつけた請求書
割勘の請求書が綴れてる
計算書出されて酔をよそほへり
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

有恒川柳會 (大阪)

十二月二十日

於有恒俱樂部
寺井鏡々報

掃除、顔
猫があるだけの日向の耳掃除 鋭々

掃除してゐれば氣の済む老婆にて
追立てるやうにハタキの音をさせ
日の眞下煙突掃除ぬつと立ち
病院の見舞掃除に待たされる
掃除する仲間別人の様に見える
庭の掃除一家總出の日曜日
思ひつき夫人掃除の事も氣を配り
大掃除鼠こゝから来るらしい
大掃除こんなところにありました
大掃除子供と海へ追ひ出され
流行歌見付掃除の手が休み
洋室でひろめしを喰ふ掃除の日
歳毎に積り積りし塵を掃り
勤直な課長掃除のなかばに來
うせ物は掃除まづきさたづねられ
獨り者掃除するより晝寝する
煩かむりして座つてゐる大掃除
もう顔が通らぬ所まで飲み廻り
小軍人末頼もしい顔で撮る
大一座嫌いな顔と好きな顔
深々と帽子の蔭の幼な顔
シャンデリヤ苦勞を知らぬ顔が寄り
弱點に觸れたか顔がつと動き
子の寝顔明日の生活變へんとす
藝廻し顔かくした指名され
麗顔のいづこに嫉妬秘め給ふ
近寄つて見てならぬ顔皺があり
一寸丈出せばよい顔出しに來る
金借りに來た顔どうでも貸さぬ顔
あの歳で顔色を見るいぢらしさ
酔うて歸る申し譯寝た子の顔を見る
眞剣な顔して營門くぐる子よ
顔よりも氣立が母の望みなり
アルバムにババを見つけた子の笑顔
落語家の顔だと思ふラヂオ版
よりもまあこれだけ違ふ顔ばかり
鏡なくばか程苦勞はせぬものを
君の顔借つて行くよと念を押す
穩やかな面もち足ること知つて居る
令夫人着物は着物顔は顔
じん常でない顔へ毛が五六本
見舞には眞面目な顔がやつてくる
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

めづらしい顔に結句酒になり

一月十日

書初、十日戎、小包
書初も去年の筆の書生部屋
書初の廣間鐵瓶だけが鳴り
書初へ神童といふも並んだり
書初に長期建設日満支
はめられた書初を見て微笑む子
書初の手筋がよいと囁まされ
書初の手本は暮に書いて置き
藝のない書初め書初めなど書き
書初めて首を左へ右へふり
皇威八紘に振ふなり書初める
書初めの出来榮え外は雪になり
湯屋出れば十日戎の人通り
賢惠龍の通つて宵の雪が散り
朝風呂で誘はれて行く残り福
明日も又續けて詣る残り福
言譯に十日戎の笹を見せ
十日戎戦争氣分で大あたり
値切られて福を授ける吉兆屋
惠美須さんニユームの賽銭付落し
十日戎お父さんに髭が出来
小包の嵩下宿屋は揺すつて見
小包の宛名かすれた文字で來る
小包を開いた時の夢を見て
小包の球根一つ芽が出てる
小包が抛られたまゝの箱で來る
調伏と知らず小包妓解き
小包の嵩ほどにない中味也
下宿からの小包母の手へ渡り
中元は二度小包になつて行き
小包は不祥なり先に着いてゐる
小包の宛名を書いて顔を染め
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

松坂俱樂部句會 (大阪)

於松坂俱樂部

十二月十八日

大三十日、紋日、門附、炬燵
冷やでよしかんしても良し大晦酒
大三十日待たれたく除夜の鐘
大三十日映畫を見てる人もある
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

起されて大つもごりのそばを喰ひ
覺悟せぬ支拂も出る大三十日
幸福な荷物かへて大三十日
義務的な日記最後の頁
よいお年をといつて別れる喫茶室
台所に子供が邪魔な大三十日
大三十日どうやら越せた湯に浸り
床がまづ元旦になる大三十日
頭丈けに正月が來た大三十日
しもた家は春が來てゐる大三十日
大三十日忘れたものゝ多い事
待ち兼ねた服がといた大三十日
肉體の相場紋日の娼婦達
大店の木の戸鐵の戸紋日晴
たと呉れる様に紋日の笹を賣り
赤たすき紋日踊りの様に賣り
星も冷えて門附女の小さい肩
門附の子をいましめの例にひき
天井をむくと門附うたひ出し
命日だ門附も呼んでやりませう
門附が去ると子供は又だゝけ
お頂戴許り達者な猿廻し
人生の持つ響門附の持つ響
法界屋いつも濕布を首に巻き
終電車法界屋ももう歸るのか
子と流すめくらの顔の生眞面目な
門附の親子よなきをすゝつてゐ
門附が湯の街の情緒高めてゐる
戀無情門附にまでなり下り
門附の三味宵やみを縫ふて來る
炬燵もう消えたと思ふ午前四時
置炬燵風の中から歸へつた子
艶めいたものに見られる置炬燵
炬燵だいて隠居お茶にも人を呼び
玉子酒お七鹿の子のこたつにて
爪弾きの三味たてかけておきこたつ
戦線へせめて炬燵の此のぬくみ
炬燵から祖母の性格思ひ出し
棄てられた破れ炬燵に似た姿
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

（順はろい）々人の係關社

主幹 藤生路郎
賛助員 池澤樂居
長谷川一雄
大田弘平
岡田直方
笠原純生
嘉納二純
田中辰二
長崎柳秀
長崎牛太
長崎野晴
長崎村作

客員 藤本卯之助
淺田退藏
末弘太一郎
島山一郎
沖野三郎
大島三郎
大谷五郎
小川三郎
龜井三郎
川村三郎
米村三郎
田村三郎

谷脇素雄
生方敏雄
島尾亮雄
窪田銀波
安川留迷
山本久留迷
前田五郎
榮谷幸二
榮谷幸二
榮谷幸二
榮谷幸二
榮谷幸二
榮谷幸二

福田山雨樓
西田雨樓
永田雨樓
奥村雨樓
岩崎雨樓
北山雨樓
水谷雨樓
水谷雨樓
水谷雨樓
水谷雨樓
水谷雨樓
水谷雨樓

松下小柳
西田小柳
後藤小柳
宮崎小柳
石曾小柳
原西小柳
加藤小柳
加藤小柳
加藤小柳
加藤小柳
加藤小柳
加藤小柳

事幹と部支

道頓堀支部（大阪市） 庄 萬とし
九三會支部（大阪市） 北山 悟郎
函館支部（函館市） 龜井 最修
高知支部（高知市） 國澤 春水
梅田支部（大阪市） 水谷 鮎美
飯川支部（島根縣） 尼 綠之助
鳥取支部（鳥取市） 中島 鐵州
松山支部（松山市） 酒井 大樓
天王寺支部（大阪市） 妹尾 八九滿
鶴町支部（大阪市） 岩橋 双虎
御池支部（大阪市） 西 川 龍
松江支部（松江市） 勝谷 山川兒
大磯支部（大磯市） 正本 水客

西條支部（愛媛縣） 荒井 英賀夫
今里支部（大阪市） 市場 浸食子
今治支部（今治市） 長野 文庫
光榮支部（大阪市） 永田 里十九
竹原支部（廣島縣） 黒本 芳泉
十三支部（大阪市） 淺野 牧人
嘉義支部（臺灣） 宮内 耕朗
兵庫支部（神戸市） 三崎 陽幸
廣島支部（廣島市） 濱田 久米雄
名古屋支部（名古屋市） 吉田 水車
北大阪支部（豊中市） 黒川 紫香
港支部（大阪市） 野本 湖磐
下關支部（下關市） 多田 多機
北鮮支部（清津府） 三嶋 美笑
蒙疆支部（張家口） 岩崎 柳路

後記

▼新春號の賣れ行きは素晴らしかった。
▼陸軍と大日の注文が来て、發送部は大變なハリキリ方である。將に皇軍慰問には本誌の大型がよろこばれてゐるそうだ。
▼本誌を時事的書ける柳誌としたことは時宜に過ぎた措置だと各方面から讃辭をいただいた。
▼蓋し、傳家の寶刀の活用は愛讀者各位の掌中にある筈だ。
▼本誌から、川柳勇士の留守部隊を紹介して、戦線と銃後の聯繫を圖ることにした。第一番に宮岡白峯君の留守部隊へ奇襲を試みた。「戦線異状なし」の報告を携へ汽車に揺られて戻る愉快さは記者ならでは味へないものがある。
▼社會ページとして映畫を扱ふことにした。試寫を觀ての試作には又新しい感動が伴ふ。映畫通の柳人の参加を期待する。
▼グラフィックのページを考えたなるべくこゝへ社會ページを経めたい方針である。社會ページ

書け一奇に 全国便箋

は出来るだけ間口をひろげたい積りである。
▼「東京だより」は某大家の覆面である。この丹下左膳が何處まで活躍するかを刮目されたい。
▼次々と新しい計劃を目論んでゐるが、すべては號を運うて發表することとする。
▼編輯部に若い人を求めてゐる。明瞭な活動家であれば男でも女でもいい。お世話願ひたい。

募集

第十六卷 第三號課題

二月十五日締切

（十句以内）

大將 堀口 人選

ピアノ 村松 夢裡選

第十六卷 第四號課題

三月十五日締切

（十句以内）

船 高須 啞三味選

櫻 渡邊 曉童選

毎號募集

近作柳壇（註切） 藤生路郎選

各地柳壇（會報）

文章（評論研究感想吟行漫文漫畫）

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製華書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲近作柳壇は全作家の雅號を募る。
▲「川柳塔」への投句は川柳人協會役員及不朽洞會員に限る。

▲各地會報は中紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

定價

一 部 金三十錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
一箇年前金（特輯號共）三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十四年二月一日印刷
昭和十四年二月十五日發行

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人 藤生 幸二郎

本社 川柳雜誌社

禁無斷轉載

電話 土佐堀 三八三三番
振替 大阪七五〇五〇番

店書捌賣

（大阪） 參文社 三越書籍部 明文堂 朝日ビル書店
其他市内各書店（東京） 東京堂 廣松堂 吉岡書店
（石塚）（京都） 三宅（名古屋） 靜觀堂

髪の美は
げに日本の
姿なり



フケ・カユミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る



伊豆椿ホーマー

伊豆椿香油本舗

大槻彩芳園

菊正宗



株式會社 本嘉納商店

清酒



のた
めに

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くことにあります。

ワダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

榎林醫學博士 推薦
片瀬醫學博士 監査



片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上